

地を、血から海を、骨から山を、髪から樹を、頭蓋から天を、脳髓から雲を作つて、其中に霞と雪とを詰め込んで置いた。又たヒミルの眉からミツド・ガルト即ち中界を作つて人間の住むべき土地と定めた。

『土地の經營は出來た。次にオーヂンは天に日月を配置し、その軌道を定め、晝夜四季を正しうしたから、地は光と熱とを受けて草や木が出来るやうになつた。神々が世界を創造した後間もなく海岸を歩いて、其新しい創造の事業に満足の意を表したが、又た其れに住むべき人間の無いのは不完全と考へて、秦皮の樹から男子を作り、之をアスカと名付け赤楊樹から女子を作り、之れをエムブラと名付けた。オーヂンは是等の人間に生命と靈魂とを與へ、ヰリは道理と運動とを與へ、ヰイは感覺と表情と表情ある容貌と言葉とを與へた。そしてミツトガルトを住所として、造られたる此二人は人間の祖先になつた。』

人間の男女が出來て、三人の神がそれ／＼種々の性質を人間に賦與したとの事は、オーヂン三兄弟の神性と其地理とを示すので、オーヂンが人間に生命と靈魂とを與へたとは、彼の土地は小亞細亞のアルメニヤであることを示して居る。何故ならばアル・メニヤは神靈存在地を意味する

からである。ヰリは人間に道理と運動とを與へたとのことを考へてラルガ地方である。ラルガとは意志を起すことを意味する。エイとは「大い」完成等を意味し、又た表情ある容貌等を意味し、高加索の土地に當つて居る。其男子の名をアスケと謂ふは、秦皮樹の英語 Ash 瑞典語 Ask 精力で男性を意味し、上に上登ることを意味し、日本語飛鳥と同語である。神々が女性を赤楊樹から作つたとは、赤楊樹の原語は Alder 又た Aller と謂ひ「凡て」及び「凡ての美しいものを與へる」を意味し、日本語ハンの木は希臘語パンで、意味に於て英語アルデルの樹の名と同じである。又女性をエムブラと名付けたは、エムブレム (Embla, Emblem) の玉章即ち美を意味し、其對譯地名は波斯の古代名稱に當るので、波斯を昔はアスカと謂ひ、又スサと謂ふたのである。其スサとは玉章のすさである。此スサなる語は別に對譯して Gal, Gol, Gaul) 等となることを知つて置く必要がある。又人間の住むべく定められたミツト・ガルトなるものは昔のアリアナ又イランで、人間の居所を意味する地である。

そしてオーヂン等の居る所の原始的アスガルトの地が小亞細亞から東の海岸方角に延長したものは矢張アガルド即ち、東海道と譯すべきである。

又た人間の居住すべき土地たるミッド・ガルトは中央亞細亞の昔のスキチヤ地方で、其れはアスケ即ち秦皮樹に當り、モンゴリヤは玉章を意味し、即ちエムブラに當つて居る。又た「人間の住むべき所」と云ふ名稱の東にあるものは滿州即ちマンチュリヤ (Manchuria, Man, Choria) であるがツミト・ガルトなる地域は、今の土其機斯坦あたりから東の山地を取つて極東滿州に至る間を云ひ、ミツム・ガルトは東山道、又た中山道と譯すべきである。

「エツダ」と「書經」堯典との關係——エツダの天地開闢は専ら土地の經營で、其土地は専らスキチヤ方面であり、又神々の生れる前に既に巨人なるものは存在して居た。元來巨人なる者は Giant (Giant) で地生の人間を意味し、Gain (又た地の母) なる神の子と謂はれて居る。支那に傳はる「書經」堯典の「堯」とは何者であるか。決して歴史上の帝王でもなく、神話上、土地を意味する Ooo の事であるのは「堯」なる文字の解剖で知れる。何故なれば「堯」とは「土土兀」即ち土を三つ重ねて机(几)に上げたもので、堯は土地又は山を神としたものだからである。土地の子はエツダの所謂巨人で、エツダが始めに土地の事や巨人の事を云ふのは、支那古典が、最も始めに堯帝から書いて居ると同じで、巨人族は堯族だからである。書經の堯典は虞書であるが、

虞とは美しく梳き、櫛けづることを意味し、前に度々云つたスキチヤは「梳き」と同語である所から考へると、書經の虞書はスキチヤ亞拉比亞種族の書物と察せられる(勿論、支那古史は、今の支那本部には何等の縁はなく、皆西部亞細亞、亞拉比亞等のものであることを一言して置く)。「エツダ」のオーチンの神等は、世界を作つた後は天に日月を配置し其軌道を定め、晝夜や四季を定めて植物の發生を助けたが、之れは堯典に、堯が義和に命じて「欽んで昊天に若がうて日月星辰を曆象し、敬んで人時を授け」しめたと同じ事を謂ふたものである。

且つオーチン (Odin) とは羅典語、英語の Odd, Odi, Add と同じで男、伯父、加へる、與へる等を意味するが、書經の義和は Giva (英語 Give) 「與へる」と同じ語で、與へるは Add を語源とするから、オーチンと義和とは同人物を謂ふたものやうである。且つ義和の「和」は加へることを意味し、オーチンの語源 Atd と同じ思想を表はして居る。オーチンにも他に二人の弟があり、義和にも義仲、義叔の二人の弟があり、三人は伯、仲、叔で、一言すれば「おち」であり「オチン」(男)族である。尙ほ書經とエツダとの比較研究に進むと面白い關係が発見されるであらうが今は此迄に止めて置く。耶蘇教創世記の始めの人間の男子アダムも Add = Odd = Odin 等の

語源關係から考へて、オーディンと同じ人物を謂ふたものである。重ねて言ふが、支那太古は全然支那本部の地には關係なく、尙ほ西部亞細亞、専ら亞拉比亞、舜は埃及、夏の禹王の國はバビロニアのスメル（夏 Summer）、其水を治めた記事の禹貢は全然亞細亞大陸の事で、之を從來のやうに支那本部に限るのは舊派の無學時代の歴史家の事である。又周の發祥地は波斯であり、東周は印度緬甸であつて——支那の歴史にも亦歴史地理にも大變動を來すのである。

## 第二章 神々、及び其アスガルドの國

右の如く天地萬物は創造せられた。神々及び人類を分類すると

- 第(一) 神々、アスガルドを國とし、
- 第(二) 人間、ミッド、ガルドを國とし、
- 第(三) 巨人族、イオーツンハイムを國とし、
- 第(四) ロキの一族、及び其國ウトガルト、

第(五) ロキの一族地獄の神の國ニッフルハイム、等となる。

エッダの謂ふ所に據れば、先づ巨人族（地生人）が在つて、其れから神々が生れたとなつて居り又其土地に就ては前に大體之れを説明して置いた。

神々——第一の神はオーディン。其長子のトールと云ふ神は神と人間との中で最も力の強い神である。

オーディンは元始の神。妻の名はフリッガである。オーディンの宮殿はワルハラでアルメニヤの天である。天を「乾」と謂ひ、フリッガは語源 Phri-gia で、アルメニヤの西部一帯フリギヤに當り、「坤」を意味する。オーディンは又元始の神で「元」に當つて居る。オーディンの長子トールは「亨」（トホル）である。オーディンの弟ギリは羅典語「利」を意味し、次の弟エイは「貞」を意味する。さればオーディンは乾であり、フリッガは坤である。又オーディンは元、トールは亨、ギリは利、エイは貞で、支那の易經に所謂乾坤も、元、亨、利、貞も、「エッダ」に於ては神話の形を以て表はされて居る。（尙ほ此方針で比較研究を進めて行かば意外の結果が得られることと信ずる。）

フレイルと云ふ神がある。好き、美、自由者を意味し、雨と、日光と、地上の果物とを司つて居る。其妹にフレヤと云ふ女神がある。美と、音楽と、戀愛との神で、又恵み深い神である。ブラギの神は武力の功名を歌ふ神。其妻イヅナは若返へりの林檎を有つて居る女神である。ハイムダルは神の國の入口のビフロストと云ふ橋を守護する神である。

ツル一名をジウと謂ふは軍の神。バルヅールは光彩と歡喜と春との神。ヘーデルは其の反對の暗黒と、盲目と、冬の神である。ワルクリーと云ふ女神達がある。此女神達は神に仕へる者で、馬に跨り兜を被り、楯と槍とを持つて居る。ワルクリーはアマゾンに對譯される。オーチンの神は巨人に對して大戦争をする時に武勇の兵士を集める心があるから、若し其必要のある時は、此ワルクリーの女武士を使者に立て、死んだ勇士を集める、其使者は此女武士の役である。

此他にロキと云ふ神がある。彼は神族では無く巨人族であるが、其智慧に富んで居る所から神々の仲間に入つて來て、神々を困らせたり、種々の策略を行ふ者で實は惡黨で、彼に三人の子がある。

神々の國——は前にも云ふた如くアスガルドと云ふ所で、其所へ行くにはビフロスト（虹）

の橋を渡らねばならぬ。アスガルドには男神達の宮と女神達の宮とがあつて、金と銀とで造つてある。其最も見事の宮殿はワルハラと云ふ所で、オーチンの住居であり、此神が其玉座にすわる時は全天全地を見渡すことが出来る。

此アスガルドは小亞細亞一帶のことで日本の高天原も亦此所であり、日本古典に阿志訶備比吉遲神とあるのは希臘語源 As-gaie-ekhos で、アスガルド As-gard と對譯になつて居る。西洋地圖に Ascania とあるは又其別譯である。オーチンの宮殿たるワルハラは高天原のことで Val-hala は Al-hala で「凡て祝賀」「あなかしこ」を意味し、高架索の事である。

オーチンの妻フリッガはフリギヤの語の變化で、其土地は寧ろ明瞭である。オーチンの弟ヤリは道理と運動との神で、其意味からナルガ地方が其土地であり、次の弟エイは表情ある容貌と言葉との神で、其意味からカウカソス地方であることが知られる。そして以上の神々の土地は皆黒海の周圍で、吾古典神代七代の地と同じである。

オーチンの第一子トールの神の地はミシヤの北の Agha-thyr-ai の地と思はれる。此地名はトールと同じ語の Thir を語幹として居る。けれどもトールの地は此他にも出來て、チグリス河口に

も印度河口にもあることを一言して置く。  
其他の神々の地もアスガルド即ち小亞細亞及び黒海四周の地にあること、信するが、尙ほ今後の研究に待つ。

### 第三章 トールのイオーツンハイム旅行

——印度河口より、中央亞細亞、西伯利亞極東まで——

トールの大旅行——トールの神が巨人の國イオーツンハイムへ大旅行をする神話がある。此旅行は印度河口から、中央亞細亞、西伯利亞の極東までに關したものである。

元來イオーツンハイムとは何處の事であるか。是は西伯利亞のことである。何故ならば之れは巨人の國で、何から何まで巨大、誇大、過大でイオーツンハイムとは *I-O-TY* の國を意味し、オーツスは希臘神話の巨人たることはアレースの章に言うて置いた、其オーツスの名と同じ地名である。其れ故にトールは旅行の始めから、巨人巨大なことに會ひ、又ウトガルド・ロキなる者の所へ行つてからと云ふものは、凡ての事物皆巨大、誇大を極めて居て、イオーツンハイムとは

巨人國の對譯に當つて居る。日本太古の陸奥又は蝦夷なるものは、實は中央亞細亞から西伯利亞一帯を謂うたもので、蝦夷とは羅典語源 *Ezra* である、又巨大、超出を意味して、イオーツンハイムの語源と同じ意味である。「義經記」は實は印度と中央亞細亞とのことを書いたもので、其の中に金商人吉次なるものが陸奥は「大過の國」と謂うたのも、イオーツンハイムの語と同じ意味である。「さらばトールがイオーツンハイムへ旅行することは、此地理的着眼を以て見るべきことを先づ一言して置く。即ち西伯利亞の旅行である。

トール出立印度河口——トールは力の強い雷神で。其寶物は第一は鐵槌、第二は鐵槌を用する時其を容易にする手囊、第三は力帶で、其帶を締めると勢力が二倍に増すのである。或時トールの神は巨人の國イオーツンハイムに旅行を企て、チアルフと云ふ人間中の最も足の速い男に食糧や旅の必要物を負はせ、又最も巧智に長じたロキを從者にして出立した。

元來雷神トールとは門を意味する名で、其旅行の方角や記事で考へると、彼れは印度河口の方から出立して居るやうに見える。何故ならば印度河口の東にグゼラットの地があつて、別語でトール即ち門（九世戸）となり、又其附近に昔の名でアピラエの地があるが、之れは大雷を意味す

る所から、茲に雷神トールの名が地名になつて居り、又彼の寶物たる「槌」は印度河中流にマリ  
リ Mali 現名ムルタンの名で出て居り、槌を使用するに容易ならしめる「手袋」はラジ・ブタ  
ナの地名となり、「力帯」の語は其南西の現名シンド Sind の名となつて、是等の系統的地名集  
團が、トールの地理を明瞭に教へて居る。又従者チャルフィ即ち「速走」の名もラン Rann(走る  
の入江の名で出て居り、ロキの名も別語で其附近の地名となつて居る。そして彼等の旅行の第一  
の記事は北の方土耳機斯坦、専らキルギス・ステップの事である。

トールは恐るべき強力の神で、イオーツンハイムへ旅行して、驚くべき力を顯したのであるが  
其地の首領で巨人たるウトガルド・ロキなる者の幻覺的魔法に由つて其絶大の事業も甚だ微弱な  
兒戯に類した者と見え、トール自身もイオーツンハイムでは何等言ふに足らぬ者と思はれた。然  
し種々の力業を仕た後で、ウトガルド・ロキは自分の魔術で其等の力業も小さく弱く見えたので、  
實は自分ながらトールの絶大の強力には非常に驚いた由を語つて、種々説明する所が有つた。今  
旅行の順序に従つて印度河口から北に向つて行く。

巨人の手袋 Ⅱ フェルガナ——トールの神は、道を進めて深い森の中へ來た頃は、日が暮れた

から宿を求めて居ると横に廣い大きな家が有つたから、三人は其家に這入つて眠つて居たが、夜  
中になると大地震がしたのに驚いて起き上つて今一層安全な所を探したら、其家の右に續いて一  
つの部屋があつた。チャルフィとロキとは其處へ這入つたけれどトールは鐵槌を持つて門の外へ  
立番をして居た。所が夜通し恐ろしい唸り聲が聽こえたが、夜の明け方になつて見ると、一人の  
巨人が自分の直ぐ傍に寝て居た其躰であつたのである。やがて巨人も目を覺ましたから、トール  
は彼れの名を問うた。巨人は自分の名はスクリユーミルと云ふが、おん身の名はトールであるこ  
とはチャンと知つて居ると答へ『昨夜吾手囊の中の寢心地は如何であつたか』と尋ねた。そこで  
トール等には其夜寝た家は、彼れの手囊で有つたことが初めて分つた。

意ふにトールの一行は、印度河方面から北の方へ行つてカスガルからテレク越を通つてフェル  
ガナ方面へ行つたことと察せられる。テレク越 (Terek 希臘語源 Tarsks) とは動搖、擾亂を意  
味し、之れが地震の土地と考へられる。其れから北へ進んで西へ入ると、フェルガナ (Ferghana  
希臘語 Pheregon) の地があつて安全と手囊とを意味し、トールの従者等が安全の場所を求めて  
遁げ込んだ所である。テレク越から其地への入口に Duzen の邑が有るが、之れは、石、鐵及び

槌を意味し、トールが終夜鐵槌を持つたまゝ番衛をして居たとの土地である。ウゼンの北にアウジヤン Audjan (audient) の邑があり、音聲聽聞を意味し、巨人の唸り聲、鼾聲の土地である。其南方にマルグラウ Margelau の地がある。朝を意味する。其西にナマンガン Namangan の地があり名乗を上げるを意味し、トールとスクリユーミルが名乗つた土地である。又其南にコーカンドの都がある是れはトール一行の安全の場所として宿泊つた家で、コーカンドのコー(希語)とは年長者を意味し、スクリユーミルの手囊の拇指に當り、又此地の首府である。されば神話の此一段はフェルガナの土地に關するものと思はれる。元來此地方のムスタグ・アタは化現の地で、巨人や化物が出る地と昔からなつて居る。此事は日本の書物にも傳はつて居る。

巨人に三大痛撃||キルギス廣原——彼等は飯をすまし、スクリユーミルはトール一行と同行することになり、食料其他を大きな袋に入れて肩に負うて出立した。日も暮方になつたから、一行は一本の大きな櫟の樹の下で寝ることゝした。スクリユーミルは直ぐ鼾を聞いて寝て仕舞うたトール等三人は食事をする爲めに囊を開けようとしても、スクリユーミルが囊の口を丈夫な針金で締めたものだから開けることが出来ず、食事をする事が出来ぬ。トールは怒つて鐵槌を取

つてスクリユーミルの頭を力を込めて打つた。スクリユーミルは目を覺まして「何だか木の葉が落ちたやうだ。諸君は食事はすんだか。もう寝たらよからう」と云うて又眠つて高鼾をかき初めた。トールは又疝癩にさはつたものだから、再び鐵槌を取つてスクリユーミルの頭蓋が深く凹む程打つた。スクリユーミルは目を覺まして叫んで云ふに「此樹には鳥が棲んで居るのか頭の上に苔が落ちたやうだ」と。彼は明け方になつて又寝入つた。トールは今度こそは彼を殺して仕舞ふと、鐵槌の柄が頭蓋骨の中へ入るまで打ち込んだが、スクリユーミルは起き上つて頬を撫で、「橡實でも落ちたか知らん。諸君はもう起きて居るか。是から尙ほ行くとウトガルドには遠くない。ウトガルドでは自分等如きよりも遙かに大きなエライ人が多い。君等は豪がつて居るやうだが君等のやうな小さい人間は決してウトガルドでは威張らさぬから其考へで居なければならぬ。君の行く道は、是から東、自分は西へ行くのだから是れで別れる」と云うてスクリユーミルは囊を負うて森の中へ行つて仕舞うた。

此神話は中央亞細亞のキルギス (Kirghis) 廣原の事で、此に言うてある櫟の樹とはキルギス即ち英語のコルク Cork 又たケルクス Quercus の事である。トール一行は、地震の安全の地フ

エルガナから北に向つてキルギスの地へ来た。食事を仕やうとしたが囊の口が解けないで空腹を感じた地はフンゲル・ステツペ、Hunger Steppe 即ち「餓鬼原」である。此地の別名を又ベク・バク・ダラ Bek-pak-dala と謂ふは字譯すると「囊・締・口」で、巨人が食料の入れてある囊の口を針金で締つた事を示すのである。(此地、空腹、食事は後に又出る)

此のキルギスの名稱は、希臘語の Kirkos = Kirghis で、圓形の板に三ツ穴のあるもの、英語の Dandy 即ち桁に當り桁は下駄で日本語のテ、イ屋即ち下駄直ほしに相當するのである。下駄には鼻緒の穴が三つある(余の郷里宇和島では下駄をヒラツコと云ふは希臘語で Hierakos 也、Kirakos = Kirghis と同じ意味である)其所でトール一行が檜の樹の下に一夜を明かしてスクリュミルは頭に三つの穴が明く程痛撃を喰はされた事が云ふてある。意ふにキルギスの地は、デデオの國下駄屋の國である。

此キルギス廣原には地名語尾に linsk の附いた大きな土地が澤山ある事とトールが三大通撃を巨人の頭に加へた事とが、一致して居るのは面白い。その三つのリンスクとは(一)北に阿克モ・リンスク(二)其南にカルカラ・リンスク(三)又其東南にコクベク・リンスクである。リンスク

のリンとは希臘語レイノ leino の縮まつた音で、打碎くを意味する。其第一撃の阿克モ・リンスク Akmo-linsk は鐵槌及び鐵砧を意味し、第二撃の Kar-kara-linsk は「頭に凹みを生ずる打撃」を意味し、第三撃の Kukpek-linsk (希臘語源 Kokkos Peg) は「穀撃」即ち「橡實撃」を意味して是等はトールの三大痛撃の記事の意味を表はして居る。トールの一行は尙ほ是から北に進んで行くのである。

「義紀記」巨人記國事——吾等はトールと共に北に進む前に、聊か日本に於ける「義紀記」なる書物の巨人國記事を學んで比較するを興味あることと思ふ。又スクリュミルなる者の記事も傳はつて居るやうである。金商人吉次は義紀記に巨人國を説明して言ふに「陸奥は大過の國にて候……境の冠者りやうぞうとて霧を起し、霞を立て、敵起る時は水の底海の中にて目を送りなどする曲者なり。是等兄弟の丈の高さ唐人にも越えたり。貞任が丈は九尺五寸、宗任が丈は八尺五寸、何れも八尺に劣るは無し、中にも境の冠者は一丈三寸候ひける」と。實に「エッダ」に所謂巨人國の人間と同じと云はねばならぬ。

かのトールがスクリュミルに出逢うた所は、丁度土耳其機斯坦の東の方で、昔は其地をサカエ



Sakae と謂うた。是は義經記の境のりやうぞうの土地たるサカヒ（境）と考へられる。スクリュミルも巨人で一種の魔術者、境のりやうぞうも巨人で一種の魔術者、其點に於ても同じ人物であるらしい。又兩人の名の比較研究をする時は、同じ語の別譯たることを知るが、其れは次に出す比較研究に説くことにする。

「梟狩劍の本地」の巨人記事——近松の「梟狩劍の本地」は印度河上流カスミル方面の事であるが、此カスミルから其北の方バミルにかけては、昔から化物と巨人との出て居る所で、平の維茂が鬼神退治に行つた時に、其家來金剛兵衛と茨菰次郎とが休息せうと十抱餘の榎の木の古根の苔蒸したものがあるから、兩人足を舉げ、腰を懸けて、世間咄戀咄をして居たが『不思議や虚空の霧の中、白挽く如き皺枯聲、「何者なれば推參な、足を伸ばしてまどろむ所、膝の上でやかましい。蹴散らして退ふすや」と呼ばる聲。振上げ見れば一丈ばかりの鬼の面……下を見れば木の根と見えしは鬼の驢、朱塗の岩とも謂ふべし。……一人太刀に手をかけて切り付けんとする所を足に乗せながら、ぬつと上げ、おうと喚く反ね足に、百間ばかり蹴散らして、消すが如くに失せにけり』と。此土地はスクリュミルの土地と同じ所で、バミルの東の方に Mustag Aia と云ふ

山がある。其アタなる語「幻惑」「悪行」を意味し、スクリュミルの巨人たることや、幻術的の事があるのは、此地方の古來からの傳説地たることを示して居る。

そこで前のスクリュミルと境のりやうぞうとの名の比較研究に歸るが、スクリュミルは其の綴りを Sk-rymir と割つて見ると、Sk. は Skae 又 Sakae に當り、リョミリは何であるか、今此絶狩で金剛、茨菰二人が『世間咄戀咄』所謂「風説」などをして居たが、是等普通の風説を英語で Rumor と謂ひ、之れがスクリュミルの Rimir の語に當つて居ると考へられる。さればスクリュミルは「さかひの風説」を意味する名となるが、義經記の境のりやうぞうとは何う云ふ名の語源であらうか。思ふに、彼等は魔術者、化幻者である所から考へて、「りやうぞう」とは其意味のリョゾー Lusio（語源 Ludo）の發音の少しく變化したものである。さらばスクリュミルは「サカヒの風説」境のりやうぞうは「サカヒの化幻者」で、兩人全く同じたることが證明される。又此地方にムス・タグ・アタなる山があると云うたが、ムス・タグとは希臘語殞山を意味しアタは化幻惡戯等を意味するのである。そして次に述べるバルヅール神話中の日本の比較材料たる殞山の三熊の大人の地も亦此山と考へられるのである。又「梟狩」の此部に「鼠袋に頭陀

袋……鬼に袋と云ふことも、此山から起つたげな」とあるはスクリーユミルの手囊事件と一致したことと思はれる。

トールは是から尙ほく巨人の本國へ進み入るのである。

**ウトガルド・ロキの都トボルスク**——トール等は尙ほ行き行くと、晝頃になつて原の中に一つの町が見えた。其町は非常に高く。仰いで頂上まで皆見るには頭を後へ肩に着けて見上げねばならぬ程である。トール等は町へ入り、大きな宮殿が有り、門が開いて居たから中へ入ると、丈の高い大きな人が數多く廣間に居並んで居る。トール等は尙ほ進んで奥深く行くと、其宮の王ウトガルド・ロキの前に出た。トール等は敬禮をした。王は嘲弄の態度で「見る所君はトールのやうだが何か藝が有るか。藝の無いものは此地に居る事は出来ぬ規則だ」と謂うた。是れからトール一行とウトガルド・ロキの家來との間に種々の競技が初まるのである。

此の原の中にある最も高い都市とは何處のことであらうか。トール等はキルギス廣原から北に向つて西比利亞の方へ行つたので、其高い都市とは昔のシビル今のトボルスクである。其地の王ウトガルド・ロキとは元來何者であるか。「外の國善見」を意味し、昔から土耳其斯坦以北は外の

國即日本太古の蝦夷(Ezeko)に當り、「外」「突出」「大過」「巨大」等を意味するので、巨人國神話の性質を其名稱に表して居る。トール等が原の中を行くと一つの町が見えた高い高いが見えた其町とは昔のシビル(Sibir)今のトボルスクの事で、西比利亞の國名は是れから出て居る。乃ちシビル Sibir とは蓋し支那文字の「紫微」で、北又た最も高い事、或は物の頂上、又た、其所に坐り居ること等を意味する所からして、高い高い町の神話が出来る。今は此町を Tobolsk と謂ふが、是れは英語系、希臘語系の Topolo-sk 「頂上・悉皆・見る」の訛つたもので、神話が、「町の頂上まで皆見るには云々」と云ふて居るのは此事である。

此神話に據つて見ると、トールの一行は手囊の地、鐵槌の地たるフェルガナ、キルギスを通つて今は西伯利亞のトボルスクまで来て居る事が察せらる。

**食事競争と餓鬼廣原**——ウトガルド・ロキの言葉として一藝の無い者は此地に居れぬとのことで、トール一行は種々の競技を演ずることになる。トールの家來のロキは早食ひ競争を申出た。ウトガルド・ロキは其家來の末席に居るロギに相手を命じて一の細長い木鉢の真中で出逢う

た。然しロキは肉ばかりを食し骨は食はなかつたに反し、ロギの方は肉も骨も食ひ、おまけに木鉢までも食うて仕舞うたから、トール側のロキの負けになつた。(後にウトガルド・ロキの説明する所に據ると、かの勝つたロギなる者の本體は餓鬼の火であつたのである。又たウトガルド・ロキは魔術を能くするのである。)

前にトール等はスクリユーミルに食物の入れてある囊の口を固く締められて、開けることが出来ないうで、餓えた話があつて、其れはキルギスのハンガー・ステッペ即ち餓鬼廣原であつたが、今此食事競争も亦其餓鬼廣原の事で、南から流れるチユー川と北から流れるサリ・ス川とが殆ど中央のサウムル湖に流れ込むことを謂うたものでサリ・ス川一帯の名稱をイツチ・コノル Jitikonor の砂原と謂ひ希臘雜典語源 Aithonor の訛つたもの即ち「焼初め野」を意味し、其全體の總稱を Hunger-steppe 餓鬼廣原と云ふ所から、食物競争や、ロギの本體は火であるとの神話が出来る。(此焼初め野は平家物語劍の巻の源太夫の出で居ると同じ土地である。)

競走IIトムスクのバラバステツベ——次はトールの家來のチアルフイが競走を申し出でた。ウトガルド・ロキの方では、フギエと云ふ若者を出して、王は人々を引き連れて野原の大き

な競走場へ出て見物をした。所がチアルフイは何の苦もなく負けて仕舞ひ、フギエは決勝點へ達して又た出立點へ二た歸へりも三歸りもしたけれども、チアルフイは未だ出立點から何程も走つて居なかつた。

チアルフイは速走を意味する人間だが、其後ウトガルド王がトールに説明する所に據ると、フギエは思想なるもので、何んぼ速走の神でも思想の速さには及ばぬ譯である。

此競走場はトボルスクから東南オムスクからトムスクのバラバステツベまでである。オムスクは思想を意味し、トムスクとは決勝點を意味する地名、バラバ廣原は追ひ抜く、前へ進むを意味する希臘語から出た地名と考へられる。

飲酒競争エニセイスク——次にはトール自身が酒飲競争を申し出した。そこでウトガルド・ロキは大きな角の形をした罰杯に使ふ杯を持ち出して「少し飲める者は此杯は一口だが、多くの者は半分は飲み得る。極弱い奴は三分の一はやる」と云らて酒を一ぱい注いだ。トールは杯を口に當てると一口に飲みほした積りだが杯を下に置いて見ると酒は減つたとも思はれぬ。又た飲んで見たが何程も減つて居らぬ。三口目に飲干さうとしたが、まだ杯の底に酒は残つて居た。

ウトガルド・ロキは嘲笑の口調で「もう善い、わかつた君は思つた程エラクは無い。何か他の藝をやつたが善い」と云うた。(後にウトガルド・ロキの説明する所に據ると、其角のやうな杯の端は海になつて居るので、トールが飲んだ爲めに水は減つて仕舞うて、實はウトガルド・ロキもトールのエライには驚いたとの事である。)

此神話はエニセイスクの事で、地理はトムスクから北に當つて居る。エニセイとは、蓋し希臘語幣及び飲酒を意味する *En-ny-sei* の變化と思はれる。角のやうな大杯即ち罰杯用のものとはエニセイ河の西の *Taz* 川タズ灣を謂うたものらしい。*Taz* とは羅典語 *Taxos* の變化で、罰を意味する川及び灣である。

大猫—イルクートスク—ウトガルド・ロキの言ふに「若し今までの御手並を拜見せぬ内ならばコンナ事は大トールには爲さぬのだが、宅に飼猫が一つある、其れを指し上げて見玉へ。こんな事は此地では子供のすることだが」と云うて一匹の大猫を廣間に跳び出させた。トールは猫の腹の下に手を當て、一生懸命に差し上げようとすとするけれども、どうしても上らぬ。やつと片足一本だけ上がった。ウトガルド・ロキは輕蔑した口調で「矢張り思つた通りだ」と云うた。

此神話はイルクートスクの事である。西比利亞地理は次第に東に進んだ。*Ilkootsk* とは希臘語源 *Hier kut sk* で、其中央の *Kut* は英語の *Cat* 即ち猫で、*Ilkootsk* とは「大猫の地」を意味するのである。ウトガルド・ロキが後で説明するのには、かの大猫は實は世界を取り巻いて居るミッド・ガルドの大蛇で、トールが其れを指し上げた時は、見て居る自分さへも驚いたとの事である。そして

此大猫は黒龍江——の事である。何故ならばミッド・ガルドとは人間の住居する中國を意味し、滿洲は人間の住居地を意味するから、其地の大蛇とは黒龍江の輩でなければならぬ。此大蛇は非常に大きく、口で尾を銜へると全世界を取巻くことが出来たとの事であるが、之れは黒龍江上流のケルン河がラダイ・ノルの湖水を中に置いてアルゲン河となり、黒龍江となつて海に入ることを云ふたもので、*Draï-nol* とは口を意味し、其口で黒龍江の尾たるアルゲン河を銜へ連ねると全世界を取り巻くと云ふたものらしい。此ラダイ・ノルには「啣へる」神話があるが、後に述べる。其の全世界を取り巻くとは文字通りの意味ではなく、蓋しイオーツンハイムの端を意味したものと解さねばならぬ。且つケルン河とは運命、死、傷害、端を意味するのである(説明

は後に此運命、死、傷害、端等の觀念は暗黒である所から、此大蛇を黒龍と云うたもので、又たアムールの名は黃龍の譯語ではなく、關係ない他の命名と考へられる。其れは後にバルヅール神話に説く。

オーチンの神は此大蛇を、世界を取り巻く深い海へ投げ込んだとのことだが、此世界を取り巻くと云ふ海も極東の海を云うたもので、カラフトの「フト」とは、希臘語 *Phtho* 又た *Phthio* で深いを意味し、黒龍江がカラフトの所へ流れ込んで居ることを深い海へ投げ込んだと謂うた事と思はれる。カラフトに就ては尙後に述べる。

**老女とトールとの角力ヤクートスク**——トールは猫さへも差上げ得なかつた。ウトガルドロキは嘲弄した。トールは怒に堪へないで、今度は角力を申出した。ウトガルド・ロキは「君等と相撲を取るやうな者は此處には一人も居ない。然し乳母のエリ(隱居を意味す)でも呼び出して来てトールと相撲取らせよ」と云うた。乳母エリは出て来た。齒の抜けたよぼよぼ姿である。トールは此老婆と相撲取ることになつた。トールは力を込めてかゝつたけれども婆はピクともせずチャンと立つて居る。トールは一生懸命の力を出して揉み合うたけれども、とうとう足が浮いて

片膝を地に落した。ウトガルド・ロキは勝負判かつたから其角力を差し止め、トールに向つて以後此一座に居る者に相撲取るなどは決して言ふなと謂ひ聞かせ、是れでトール一行の競技をお仕舞ひにした。日も暮れ方になつたから、一同を宴席に集めて、愉快に其夜を過ごした。(ウトガルド・ロキが後に説明する所に據ると、此老婆なるものは「老齡」其もので、人は誰でも早晚其れに殺されぬ者は無いのに、トールは僅かに片膝ついたばかりとは實に驚くべきエライ者だとのと。)西比利亚地理も東極ヤクートスク、オコツスク、カムサツカまで来た。ヤクートスク Yakutsk とは、アクートスクの訛で、羅典語 *Acutus* 激勞を意味し、トールが一生懸命で揉み合つた角力を意味する地名である。スタノヴィイ山脈の南の端に續いて北に亘るアルダン Aldan 山があるが、蓋し老齡を意味する。又其山に沿つてアルダン・ナンシ Aldan Nunshi 川があるがナンシとは蓋し英語のナンシ「尼」或はナース *Nun* 乳母を意味して、トールと角力取つた老婆の地名となつて居るものと思はれる。老婆はピクともせず立つて居た。之れはスタノヴィイ Stanovoi 連山の事で羅典語「元氣に立つ」を意味するのである。又昔の「女直」の民族名である。トールの足は浮いた。之れはオコツスクの地名である。Okhotsk をアホツク或はオホツクなど發音す

るが、それは何れでも可い。語原は希臘語 オキシ Okhos で、浮くを意味する。

競技の有つた翌朝トールは出立の用意をした。ウトガルド・ロキはトール等を大にもてなし、町の門まで送つて別れる時「今度の旅行は大に當が外れたであらう」と。トールは「大に恥をかいて残念であつた」と答へた。所がウトガルド・ロキは「否やさうではない。君等は再び此地に來る人でないから今は眞實を語らう」と云うて、トールが競技で負けた如く見えたは、皆な自分の幻術でくまましてさう見させたばかりで、鐵槌で三大痛撃をくらはせられた時、自分は横へはづしたから善かつたが、若しあれで撃たれたものなら、自分は殺されたであらう。トールの三大打撃で山の上に三つの深い凹みが出来たことや、食事競争の餓鬼のことや、競争者の思想其ものゝ事や、杯の海の事や、大猫のミットガルドの大蛇のことや、老婆の老齡其ものゝことやなどを明かし、トールの力の偉大なのに驚いた旨を語り「再び此地に來ないが善い。若し又來るやうなことがあらば、自分は又他の幻術で防ぐから決して君の名譽にならぬ」と云うた。トールは之を聽いて怒つて槌を取つて投げ付けたら、ウトガルド・ロキの姿は忽ち消えて、あとは只草茫茫たる野原となつて仕舞うたとのことである。槌で撃つことを希臘語で「レナ」と云ひ、レナ河の名はそれである。

是れで西比利亞太古地理神話の概略は解つて居るが、尙ほ太古の蒙古、滿洲、韃靼の事や、露西亞民族の事がロキの子女の神話に出て居る。

(序を以て茲に一言して置くが此雷神トールの神は、日本古典の豪傑の神建得雷神、チアルフイは稜威雄走神に當つて居る。)

## 第四章 ロキの一族

—蒙古、滿洲、韃靼、樺太—

ロキの三子——ロキは、前にも言うた如く、初め巨人族であつたが、其智略を以て神の仲間入りをしたもので、三人の子がある。其第一はフェリンスの狼、第二はミッドガルドの大蛇、第三はヘラと云ふ地獄の女神であつて、是等の怪物は他日害をするから神は其所分をせねばならぬので、ミッドカルドの大蛇を深い海の中へ投げ込み、死の女神ヘラはニッフルハイムへ投げ入れて仕舞うた。然し一つもてあますのはフェリンスの狼であつた。

フェニリスの狼を所分する——には鎖を以て之を繋ぐことだが、神々が之を繋ぐまでにはなか／＼の骨折であつた。何故ならば此狼は最も頑丈な足械でも蜘蛛の網か何にかのやうに裂き破るから遂に神々は山の精に使をやつて、グレイプニールと云ふ鎖を作らした。其鎖は猫の足音から出る響と、女の鬚と、石の根と、魚の呼吸と、熊の魂と、鳥の唾液との六つのものから成立つて居て其出来上りは丁度絹糸のやうな柔かな滑らかなものであるから、神々は狼に向つて是れで縛ることなら善いではないかと言ふと、狼は何だか魔術で出来て居るものではないかと疑念を起して、危険なもので無いとの保證に、何れかの神が狼の口に腕を差し込んで居るなら縛られても可いと言うた。が、誰も狼の口に手を入れる者が無い。只ツルと云ふ軍の神が其れを取てする勇氣が有つた。然し狼は到底足械は破れないから軍神の手を咬み切つた其れ以後ツルは片手の人になつた。

ロキなるもの——元來ロキなる神は羅典語 Luk 英語 Look で光、目、見る等を意味し、希臘神話の海神ポセイドーンに當つて居る。目の希臘語は Omma で又海、馬、梅等の語源となるのである。此神はエッダ神話でも謀叛性の神であるが、希臘神話でも其うである。又兩神話通じて地

震の神である。此ロキの初めの地は、亞拉比亞東南隅のオマン現名ウマの地で、次に印度河の口に其地が出来、次第に東して恒河の口にも、又尙ほ進んで亞細亞極東マリチメの地、アムール、滿洲にも出来たことは種々の材料で知れるが、要するに海神は、世界の海岸何れの所にでも其領地がある。

思ふに此ロキもミツドガルドのロキも元同族で、此ロキはミツドガルドの方から分れた者のやうである。ロキ族は日本史上の清原(スキヤ)氏である。

今此に説く三怪物の地は、滿洲、蒙古、韃靼であるが、其等の民族發展は陸からしたか、或は大回りして東の海からしたかと云ふ事は他日の宿題にして置かう。

蒙古フェニリスの狼——フェニリスの狼とは何であるか。フェニリスは羅典語で Fenris で鐵製を意味し、此狼は鐵體或は鐵意の狼と譯せば當つて居る。蒙古でバイカル湖の南、西比利亞と蒙古との境界地方を古代の支那地圖では鐵勤、源語で Kal-kins と云ふてある。又其東南に互つてヤプロノイ Yablonoï 山があり、又其南にガラタ Galata 山が有つて、狼山を意味し、古代支那地圖には狼居胥山とあり、胥は捕へることで狼を捕へて置いた所を意味する山と解すべく

——此地方に鐵勒即ちフニリスと、ヤプロノイと、ガラタの狼居胥との三つの神話事件が明瞭に存して居る所を見ても、此バイカル南方の地はフニリスの狼の地と斷定して誤らぬと思ふ。

此狼は六つのものから、成立つて居る所の下思議なグレイプニールなる紐で縛られたのだが、此六つの物とは南、泰赤烏地方からバイカル湖に流れ込むセーレンガ川の支流の名を謂うたもので泰赤烏 (Tajuts タイイウ = Tai-joes) とは固く締める紐を意味する希臘語の變化である。其紐の成立つて居る六つのものは、

(一) 猫の足跡から出来た響——Orchon (斡兒汗) 川

(二) 女の鬚——Kara Korum の町即ち和林

(三) 石の根——Jidi 川即ち支那地圖の石水

(四) 魚の息——オルコン川反對側 Urmukta の町

(五) 熊の魂——セーレンガ (薛靈哥) 川

(六) 鳥の唾液——セーレンガ上流 Telgiri-Muren 川

であるが、其語源や譯の説明は餘り専門的になるから、凡て略することにする。是等は皆セーレン

ンガ川或はオルコン川の支流の名で、是等から神話に所謂グレイプニール Gleipnir (Glue + tips + neura の合成語、堅く重壓する・紐を意味す) の鎖が出来て居つて、之れが泰赤烏の古代名稱になつたと思はれる。又此河の東部一體を Gunguluta (Congluta) 廣原と謂ひ、固く締めるを意味する地名であり、狼が其紐で縛られたこととなり、其地に狼居胥山即ちガラタ山がある。

**腕かみ切られた軍神**——フニリスの狼はグレイプニールの紐で縛られた。又た解いて貰ふ望みは無い。遂に口の中に差込んだ軍神の腕を啗ひ切つたとの事は其東方アムール河の上流ケルン河とダライノル湖の名になつて居る。Dalai-nor とは口の湖を意味する所から之れが狼の口となり、其れから東へ流れ出る河を Arsun 河と云ふが、アルグンとは希臘神話の軍神アレースの事で其別名は Ty (散る) である。西からダライ湖に流れ込むケルン Kernun 希臘語源 (Karolen) は腕を害するを意味する川で、アルグン河即ち軍神チルは、ダライノル即ち狼の口の中に入れた腕を害せられたのがケルン川である。此川は黒龍江の源流である。

此うして吾等はフニリスの狼の神話に由つて、蒙古の古代地理を研究し得たものである。神々は此の狼を縛るには非常に骨を折つたとの事だが、吾等も之を研究するには中々容易で無かつた。



ミッドガルドの大蛇——ロキの第三子たるミッドガルドの大蛇は黒龍江であることは前に  
トールの旅行中に説いたから此に省略する。

地獄の女神ヘラ、樺太——ロキ第二子地獄の女神ヘラの名は韃靼即ち Taretar の事であ  
る。タルタルとは明瞭に希臘語で地獄を意味するから何の説明も不用である。神々は此ヘラ女神を  
ニッフルハイムに投げ込んだとは、歐羅巴へ逐ひ遣つたことであるが、此事は後に説明するとして、  
地理的關係の具合によつて、此にカラフトの神話を述べよう。

アングル・ホデイ——最も古く樺太の事を書き傳へて居る書物は「エツダ」であらう。樺太は  
誤字でカバフトでなく實はカラフトと云はねばならぬ。カラフトの事はエツダの中のバルツール  
なる神の身の上に關して、フリッガ女神がロキの妻たる女預言者のアングル・ホデイ Anger-bode  
に相談しようと思つた時、此女預言者は既に死んで位牌になつて居たとの記事があるが、(此事は  
後に述べる)此アングル・ホデイの名と、預言者なる言葉と、死んで居たとの三つの言葉が、カ  
ラフト地名を表して居るのである。

カザリン——カラフトの別名を又 Sagalin (Saghalin) と云ふが之れは「預言者」を意味する羅

典語 Saga-alin のこと、極めて明瞭である。

カラフト——此預言者は死んで居た——位牌になつて居た——其事を希臘語で Kara-Bytho と  
謂ひ、其れがカラフトとなつたに過ぎぬ。又た此女預言者の名をアングル・ホデイと云ふは、カラ  
フトの別譯である。今カラフトの源語を一層進んで説明するならば、

Kara は希臘語の頭、心、からだ(體)なきがら。又た Anger に當る。Bytho は浮圖、太、菩  
提(體)で、ボダイは英語系の Bodhi (體)、即ちアングル・ホデイの Bode に當る。

さらば女預言者アングル・ホデイはじき骸、菩提、浮圖で——カラフトの事である。「エツダ」以  
外にカラフトは位牌と云うてある書物が日本にもある。

「エツダ」にカラフトの事が最も古く能く出て居ることを知らず、現時ナマ學者が、色々小さかし  
い語源論などをして居るのは、實に笑止千萬の至りである。されば

カザリンとは Saga-alin 預言者、又た桂とも云ふ

カラフトとは Kara-Bytho 菩提 本綿(太物)

アングル・ホデイとは カラフトの別譯(身體)

であるとの断案を下して誤らぬ。新聞雑誌などで樺太と書いてカバフトと振假名するなどは願はくば止めて欲しい。日本人が自國の地名を正しく知らぬとか又は其れを間違へて發表するなどは實に不都合千萬と云はねばならぬ。

以上數章で中央亞細亞から東、極東のカラフトまでの大古神話と其地理とは一と通り明瞭になつたが、尙ほ一つ残つて居るは地獄の女神ヘラが、ニッフルハイムへ投げ込まれた神話と、其地理との研究で——其れは南部露西亞であるが、其れを述べる前に、バルツールに關する神話と地理とを説かう。

## 第五章 バルツール神話

天地間萬物不害の誓ひ——バルツールは日光と、春と、歡樂との神で、神々の中で最も輝き、又神々から最も愛されて居た神であるが、どう云ふ譯か、此頃甚だ夢見が悪うて生命が危いとのことから、彼は其事を神々の集會で物語つた。其處でオーチンの妻フリッガは、火から、水から、鐵から、凡ての金屬から、木から、凡の病から、水から鳥類から、毒から、匍匐ものから

決してバルツールに危害を與へぬとの誓を取つた。けれども夫オーチンの神は尙ほ之れに安心が出来ぬので、かのフェニリスの狼と、地獄の女神ヘラと、ミッド・ガルトの蛇の母たるアンデルボデーなる女豫言者に相談せうと思つたが、此女豫言者は其時死んで居たから、オーチンは彼女を尋ねてヘラの領地へ行つた。

他の神々は、フリッガが爲した事を十分だと思ひ、何物もバルツールを害することは無いと信じ、バルパールを的として或は木片、或は石、或は劍、或は斧などを投げ付けて、其れが何の害をもバルツールに與へぬを見て慰みにし、又其如き事をするのは却つてバルツールの威徳に對して敬意を表することゝ信じて居た。

ロキの惡事——けれども神々の間に悪い事をするロキは、又々惡企を起して、或時女の姿になつてフリッガの許に行て、神々がバルツールに物を投げ付けたりなにかする意味を尋ねた。フリッガは何心なく實情を語り、天下何物もバルツールを害せぬとの事になつて居る由を話した。時に其女は驚いた眞似をして「天下凡の物がバルツールを害せぬことを誓うたか」と問うた。フリッガは答へて「凡の物は皆誓うた、ガウルハラ(Mist-Jeloe)の東にある、最も小さい宿木一つは、

餘に若く小さかつたから、此木からは其誓を取らなかつた」と言うた。

宿木——そこでロキはシメたと思ひ、早速其宿木の枝を切り取つて、ヘーデルと云ふ盲目の許に行つて「汝は何故バルツールに物を投げ付けぬか」と尋ねた。ヘーデルは、自分は盲目であるから、何方へ投げて善いか判らぬから、投げ付けぬ由を答へた。ロキは「それなら自分が、汝の手を取つて教へるから投げ付けよ」と謂うて、其宿木の枝をバルツールに投げ付けしめた。宿木はバルツールに命中して彼れの身を突き通し、彼れは直ぐに死んで仕舞うた。

ヘルモットの使命——神々は之を見て大に驚き、皆泣き悲しんで、直にバルツールを殺した者を殺さうと思つたが、其地は神聖の土地であるから手を下さすわけに行かぬ。女神フリッガは發案して、誰か死の國のヘラ女神の許に行つて、バルツールを再びアスガルドへ返へして呉れやう頼みに行く者は無いかと尋ねたら、最も「速き」の名のあるヘルモットと謂ふ神が其使命を引き受けた。彼はオーチンのスレイブニルと謂ふに駿馬に打乗つて、風の速力で九日九夜の間眞つ暗の谷を駆け續けて、グオール河に到着し、其黄金に輝く橋を渡つた。橋を衛つて居る少女は彼の名や素性を尋ね、又た死人の相も無いのに、何故死の國へ行くかと問ひ、昨日此橋を五組の死人の群が渡

つたが、貴下一人の通行する爲めに橋の動搖することは、前の五組の者の通過した時よりも激しいと言つた。

ヘルモットは、答へた「我はバルツールを探した來た者である。若しバルツールが此處を通りはせぬか」と問うた。橋守の少女は「バルツールは此グオール橋を渡つて、死の國へ行た」と答へた。

ヘルモットは尙ほ其旅路を急いで、遂に死の國の閉された門まで來た。彼は馬の腹帯を締め直ほし馬に拍車を入れて、恐ろしい勢で、其門に觸ることなく、之を跳び超えて地獄の宮殿に行き着くと其廣間の第一の上座に兄弟バルツールが居たので、其夜は彼と共に一夜を過ごした。翌日、彼は地獄の女王ヘラに會つてバルツールの死に由つて神々の悲歎の非常なことを語り、是非バルツールを再で神々の國アスガルドへ歸らすことを懇願した、ヘラは、ヘルモットの云ふ通り、皆の者から愛せられ惜しがられて居るかを試す必要があることを告げ、世界上一切の萬物が一つも残らず、バルツールの死を悲歎くならば、再び生きかへらすが、若し一物だも彼に反對の感情を持つものがあらば、矢張り地獄に置く由を語つた。

ヘルモットはアスガルドに歸つて、盡く其見聞きしたことを報告した。そこで神々は全世界に使

者を立て、凡の物に、バルツールの泣き悲しむことを求めた。世界上の萬物は木も、金属も、動物も皆盡くバルツールの爲めに泣き、再び彼を生き歸らすことを願うた。

**鬼婆タウクト**——けれども使者等が歸る途に、ミッドガルドの東で、巨人等の土地に接するヤルンギッドの森を通つた。此地の森の樹木は皆鐵である。其所の洞穴にタウクトと謂ふ一人の瘠せ衰へ、骨と皮とで、齒の抜けた鬼婆が居て、使者達をヒヤカシて「皆々は天國はつまらぬから、此タウクトの鐵の林を樂しまうと思つて來たのか」と謂うた。ヘルモッドは「我等はそんな笑諷に來たのではない。バルツールが死んだから、彼れの爲めに泣いてもらひに來たのだと答へた。タウクトは答へて、「バルツールは死んだのか。我は乾いた目でバルツールの火葬を泣くであらう。他の凡の物等は泣き度ければ泣いたが善い。然し、我は泣かぬ。ヘラ女神は矢張り彼を自分の國へ留めて置いたが善からう。と言ひ、嘲弄の言葉を残して穴の奥へ遁げ込んで仕舞うたから、バルツールは、アスガルドへ生き歸ることが出ぬことゝなつた。元來此タウクトなる娑は屢々神々の間に悪いことをして來たロキの變裝した者である。

**バルツールの火葬**——バルツールは生き歸らぬ。神々は彼れの屍骸を海邊へ運んでだ。其

處には世界一の大きな船ヘーリングカム(「大行」と謂ふバルツールの船が濱邊に着いて居る。其甲板に火葬の薪が積んであつて、其上にバルツールの屍骸を載せると、妻のナンナは悲みのあまり其火の中に入つて夫と共に焼死した。多くの神々も會葬し、オーチンは妻フリッガと、ワルクリオルと大鳥とを連れて第一に來、フレイはグリーンブルスチと謂ふ猪の牽いた車に乗つて來、ハイムダルはグルトフと云ふ馬に乗つて來、フレヤは猫に牽かした車に乗つて來、霜の巨人達や、山の巨人達も來た。バルツールの馬は美しい馬衣を着せられて、主人に殉死として焼死された。

**ロキの苦しき罰**——悪事の張本人ロキは、神々が非常に怒つて居て、到底其罰の免れ難いことを知つて山へ遁げ込んで、其處へ四方に入口が有つて、四方を見渡し四方何れへでも遁げる事が出来るやうな一つの小屋を作つて隠れて居た。けれどもオーチンは遂に彼の居所を知つて神々を遣はして彼を捕へしめた。そこでロキは一匹の鮭となつて、小川の石の間に隠れたが、神々はキロが使つた網(「ロキは網の發明者である」Ma-ami-ia Lens 即ち間宮林藏に對譯される。これが徳川史時代の人間か?)で其小川を曳いて行つたから、ロキは到底捕へられると思つて、網から上へ飛び出ようとしたが、トールが其尾を押さへた。其れが爲めに鮭の尾は薄く細くなつ

たこのことである。神々はロキを鎖に縛り、頭の上に一匹の蛇を懸けつるして、其毒の汁を一滴づつ彼の顔に垂らすやうにした。ロキの妻シグナは其側に坐つて、其毒汁を杯へ受けて、其れが一杯になつて他へ明けに行く間は、ロキは其毒汁が顔へ滴る爲めに、非常の苦痛で、世界が震ひ動くほど身を悶へて悲鳴を上げる、之れが地震の原因だと謂はれて居る。凡て是等の事は女神ヘラが、未だニッフルハイムへ移されぬ前の事と見ねばならぬ。

**バルツール、天稚彦、アモールの比較**——此バルツールと、日本神代の天稚彦と、希臘神話アモールとは比較研究上同一人物の別傳である。アモールと天稚彦との同一人物たることは前に希臘神話アフロチテの章に説いた。アモールとは「愛」を意味し、バルツールは神々から最も可愛がられた稚い神である。バルツールが宿木の矢に殺された事は、天稚彦が高木の神の矢に殺されたことに當つて居る。バルツールが死んだ時女神フリガが非常に泣き悲しんだことは、天稚彦の妻「下照姫の哭かせる聲、風の響、天に到り」と云ふ有様であり、又バルツールの死んで居る所へ凡の神々も有らゆる者も來て悲んだことは、天彦が死んだ時、其父、妻子などが天から降りて來て悲んだ有様と同じである。されば大體是等の材料で、バルツールと、天稚彦と、アモールと

の同一人物であることは十分察せられる。

**宿木と「日本振袖始」の三熊の大人**——神々はバルツールの爲めに天地間の萬物——草木からも、金石からも、水火からも凡ての病氣からも、動物からも、鳥類からも、——凡の物から、バルツールを害せぬとの誓を取つた。唯だ其誓に外れたのはワルハラ東にある小さい幼い宿木の一つであつた。之と同じことが近松の「日本振袖始」の三熊の大人に關することにある。日本振袖始の謂ふ所に據ると——美濃國嶺山の巖窟に三熊の大人と云ふ悪鬼隠れ住み人民に毒氣を吹きかけ、人の命を取ること毎日千首餘りである。神々は異しみ玉うた、何故ならば高天原で天照大御神は諸の悪鬼を誅め玉ひ「長く我國に仇を爲さじの誓の手形」を押さしめ玉うた。「異類異形の手形、鳥の脚、蛇の爪或は人に似たるものもあり、螢火の輝く悪神、蠅聲なす疫神、邪神、鳩槃荼！又、藍姿神、此神國に害を爲さじと」凡の者の手形は盡くある。然るに是等の「悪鬼の手形の中、三熊の大人と云ふ手形更にあらざれば」手形に洩れた者たることが知られた。元來此三熊の大人なる者は、天照大御神が、凡の物から手形を取り玉うた時は「八重の汐合に隠れ住み、かの手形に外れし」者で、風水、山嵐、霧霞と變じ、人民に邪氣を吹きかけ、惱まし、煩はしめ

る者である。

かのバルツールの生命を取つた宿木は源語 Mist-Jetoe で「霧霞を起す物」を意味し、三熊の大人も語源 Mikyma 「風水、山嵐、霧霞と變」する者たる點に於て、三熊の大人は、ミストレトの宿木と同じ物たることは語源上から證明される。そしてバルツールは前に言うた如く、天稚彦と同じ人物であるが「日本振袖始」でも天稚彦が三熊の大人を退治に行き、大に惱まされる話があるのも、比較上最も面白いことである。バルツールの場合の使者の神は最も「迅速」の名であるが、「振袖始」の此場合の使者の名は「速日の神」で、是れも同一人物たることが知れる。

**宿木の地理**——エッダ經の所謂神の居所たるワルハラは、日本の高天原と同じもので、是れは小亞細亞のアルメニヤのことである。そして、此ワルハラの東に小さい宿木が在ると謂うてあるが、前に言うた如く宿木の源語は「ミスト・レト」即ち「霞を起す」を意味し、アルメニヤの東に小さいカスピ即ち霞の土地とカスピウム海とある。之れが即ち誓を外れた宿木の土地である。然し霞の土地は尙ほ東の印度河の上流にも出來てカスミル國が其れである。そして「日本振袖始」の三熊の大人事件の土地は印度河上流のカスミル國で、之れが成長してバルツールに危害を加へた

宿木即ち「霞を起す」と云ふミスト・レトの土地となつたのである。其れ故に前者はカスピ又はカスピウムと謂ひ、後者はカスミル國と云ひ、同じ發音の「霞」となつて居る（カスミル國即ち霞の國の隣はカスガル即ち春日の國である）。バルツール（Bal-dur）の土地は印度河口の西バルキスタンのパンチュールと對譯される。

**天國より地獄への地理**——死の國へ行て居るバルツールを再び天國へ得る爲の使命を負ひて地獄へ旅立つたヘルモッドの神は、其使者の神たり、又た足疾きことに於て希臘神話のヘルメースと同じであり、又其名もヘルモッドとヘルメースとの小な語尾變化があるに過ぎぬ。

扱てヘルモットの行くべき地獄の地は何處であるか。地獄の地名は世界に澤山あるが。今此北人神話の所謂地獄は何處であるか。地獄を希臘語で Tartar と云ひ、之を支那字韃靼と書く。亞細亞の極東樺太島の海峡に、今でも韃靼海峡の名が存して居る。死んだバルツールはアモールと同じ人物たることは前に謂うたが、極東にアムール州がある。即ち此部分に地獄の名があり、アムール即ちアモールの名があるを見ても、此神話の所謂地獄の地理に見當が付くではないか。さらば使者の神ヘルモットはワルハラの神の國即ち小亞細亞方面から東に向つて極東アムール方面へ

旅行するものと見るべきである。

前にトールの大旅行は印度方面から北へ行つて西伯利亞の極東まで行くことであつたが、ヘルモットの旅行は何うであるか。彼は神の國たるアルメニヤ方面から土耳其斯坦を東して蒙古を通過し、興安嶺を越えて沿海州方面へ出て行つたことが知られる。彼は途中グオール、Gyoll 河の橋を渡つて居る。グオール河とは何れであるか。其名は無いが、蒙古の國の河と思はれる。何故ならば蒙古 Mon-gol の下半語 Gol は Gol、其れから Gyoll 等となつたものと察せられるからである。意ふに是れはモンゴリヤのオルコン河であらう。且つヘルモットの此橋を通過する時は橋が大に動揺いだとのことで、ガウル Gaul は日本語がぶるで「動揺る」ことを意味するから此橋のある土地はモン・ゴル即ち Gyoll の地と云ふことは文字の紙背に書いてある。又た此地方一帯は昔は支那の書物に蔑里乞部即ち Merikis と謂ひ、羅典語メルキュリイ Mercury の地で、希臘語系のヘルモット即ちヘルメースに對譯されることは、ヘルモットが此地方を通過したことの證據を提供するのである。

ヘルモットは尙ほ進んで、地獄の、閉された門を馬で跳び超えたとあるが、是れは滿洲興安嶺を超えたことである。興安嶺とは希臘語源 コーアン Khe-ana 「閉す」を意味する名で、地獄の閉された門とは即ち興安嶺のことである。

興安嶺を越えたら、其次の土地はアムール州と、プリモールスカヤとである。アムールは前に言うた如くアモール即ちバルツールの別名である。其地のプリモールスカヤは第一上座を意味し、バルツールが第一上座に居るとのことに當つて居る。そして其地方一帯は韃靼即ち地獄の地である。さらば吾等はヘルモットと共に地獄に旅行してアムール、プリモールスカヤにバルツールを認めたものである。

使者ヘルモットはスレイブニルの馬に乗つて地獄へ行つた。馬の行き留まる所をマリ・チメ・プロビンス Maritime Province 「馬の爪の留まる限り」と謂ひ、即ち別譯沿海州がヘルモットの行きづまりの所である。

曩きにヘルモットがグオールの橋を渡る時に橋守の女が、昨日此橋を五組の死人が通過したと謂うたが、此五組の死人なるものは松花江流域にある所の昔の「五國部」なるもの即ち彼等の東方移住と察せられる。

使者等がバルツールの爲めに天地間の萬物が泣き惜しむことを求めて歸り途にミッドガルド即ち滿洲の東のヤルンギッドの森で鬼婆 (haggard) の所に立寄つたことは吉林省吉林府と考へられる。吉林とは希臘語キーリン Kherin 即ち鬼婆を意味する地名である。此地方を昔は女眞又は女直と謂ふは、鬼婆——矢張り女の土地たることが考へられ、其地名ヤルンギッド Jarvid とは希臘・羅句語 アルン・ビッド Arn-vid で「希望拒絶の寡婦」を意味する語で、キーリンの別譯である。

火葬の船——バルツールの屍骸は海邊へ運ばれたとあるが、マリチメ・ズロギンスは馬の爪でもあるが、又た沿海州を意味し、即ち海邊である。(日本の聖徳太子の夢殿とは此沿海州のことである。彼れの火葬の船は世界第一の大船とのことは、アムール州の北海岸のプリモール・スカヤのことで「第一」を意味する。船の名ヘーリンガムとは英語 Herring 即ち鱈又は鯨で、又「大行」を意味し。プリモール・スカヤの地名に譯せられる。且つ此海をオコーツスクと謂ふが、オコーツスクとは希臘語語幹 Okeios で、船、輿などを意味し、バルツールの船のことを此海とオコーツスクの市の名に保存して居る。(日本で天皇の御遺骸を御船代に乗せる儀式のあることが考へ合はされる)。

バルツールの妻ナンナも共に自ら火に投じて死んだとのことだが、アムール江の南の枝流松花江の上流をノンニウラ Nonni-ula と云ふが、其 Nonni は或は彼の妻のナンナ Nanna の名の少變化と思はれる。

ロキの隠れ場所——バルツールを死に至らしめたロキなるものが遁げ隠れた所は樺太である。ロキ Loki は英語 Look と同語で「見る」を意味し、彼れが四方を見得る小家に隠れたとあるが、其れは樺太即ちサガリンのことで、サガリン Saka-alin 即ち「凡てを見る」を意味する。彼は鮭に化つたとあるが、其れは樺太島の形ではなからうか。又たサガリンのサガもサゲVサケと變化し得る語である。

神々は彼を鎖に縛つて、頭の上に一匹の蛇を懸けつるして其毒汁を滴らしたとは、樺太の北端に黒龍江の注ぐ事を謂うたものと考へられる。ロキの妻シグナが側に坐つて看護し、其毒汁を杯に受けたとのことは、黒龍江の河口の昔の奴兒哥の部族の名で、妻シグナの名は希臘語シグナ Si-guna 看護婦を意味し、奴兒哥又は奴兒干とは英語系のヌルス Nurus 又はヌルケ Nource と同語



で、矢張り看護婦を意味する部族名である。蛇の毒汁が滴る時にロキが「苦しむ」とのことは、樺太の北端に昔の「苦夷」なる部族名が之を説明して居る。

**日本津輕とバルツール關係**——バルツールの地獄地理は以上説いた通であるが、日本本州の北端陸奥國の津輕にもバルツール關係の土地があるのは學者の注意すべき所である。思ふに之れはバルツール關係の民族が西部亞細亞から極東に来て、又日本の津輕へ移住して、其等の地名を寫し付け、又其神話を紀念したものと察せられる。

其れ故に中央亞細亞にスンガリーの國がある、其地名が東に遷つてスンガリー江即ち松花江となり、又それが東に遷つて津輕となつたもので、「津輕」はスンガルの轉訛音である。沿海州に烏蘇利江がある、其れが日本の陸奥斗南半島宇會利山（又恐山）の名になつて居る。

バルツールは希臘神話のアモールと同じ人物であり、之れが極東のアムール州となつて居るが日本津輕の首府弘前（希臘、羅典語 Philo-sagi）は、トマス・モアの「ウトオビヤ」なる書物にハ羅典、希臘語アモロット（Amaurot）となつて居て、アモール即ちアムールを語幹としたもの、別譯である。又弘前の西の岩木山の岩木神社には顯國玉神が祭つてあるが、此神は大國主神

の別名で、天稚彦即ちバルツールの妻下照姫の父に當る神である。

以上の研究に據ると、バルツール神話は、西部亞細亞から極東までに及び、又日本の北端にまで關係があることが知られ、太古の民族移動歴史に非常の興味と材料とを提供することになる。

## 第六章 ヘラ女神のニツフルハイム

——南部露西亞の肅慎——

**ヘラ女神**——ロキの第二子フェニリスの狼は蒙古の土地に縛られた。第二子ミッドガルドの大蛇は深い海を意味する韃靼海峽に投げ込まれた。

第三子の地獄の女神ヘラは、神々は之をニツフルハイムへ投げ込んで、其地の九の領土を支配さすことにし、ヘラ女神は自分の所へ来る老、病、死の者等を皆自分の領土に居らしめた。ヘラ女神の宮はエル半ドネル（Elvidner）と云ふ所で——其食卓は「空腹」、其ナイフは「饑餓」其奴僕は「遲鈍」、其侍女は「魯鈍」、其鬮は「懸崖」、其臥床は「床虱」と「憂慮」、部屋々々の垂帳は「燃える苦悶」であつた。又女神は半身は肉色、半身は、藍色であるから、直ぐ其れと知るこ

とが出来来る。そして又極めて厳格な謹慎的の顔付と云うてある。

吾等は此神話に由つて亞細亞の極東と南部露西亞との人種關係を知ることが出来、又南部露西亞の黒海岸の地理の研究が出来来るのを愉快に感ずる。又面白いことは日本のアイヌ族と露西亞との相貌が似て居て、かのトルストイの如きは、純然たるアイヌと同様なにも理由を發見することが出来る。

南部露西亞はニッフルハイムの國であり、又黒海岸の露西亞の地は、地獄の女神ヘラの宮殿の所在地であることは、神話の記事で知ることが出来る。東方歐羅巴は實に厭ふべき人種名、國名を有つて居る。露西亞人はスラブ人種即ち奴隸民族であり、又グズ、魯鈍 (Stow-Slav と同語) 人種であり匈俄利人は餓鬼民族で、如何にも地獄民族には適當した名である。然るに尙ほ神話——神話地理——を研究すると一層甚だしく嫌惡の感が起きずには居らぬ。

ニッフルハイム——ヘラ女神の投げ込まれてニッフルハイムとは、明確には何處であるか。

其れを極めるにはニッフルハイムとは何を意味するかを知らねばならぬ。ニッフルハイムとは語源ニ—ホ Nepho (日本には新穂と書く)「眞面目の土地」を意味する。其れ故に女神の容貌は「極

めて嚴肅な、謹慎的である」と謂うてある。女神の始めの土地は亞細亞極東の嚴肅—眞面目の土地——即ち肅慎、寧ろ地獄の土地たる韃靼であつたが、今又移されて投げ入れられた土地も、本元の土地と同じ名稱を有つて居て、肅慎と云ふのである。肅慎は昔、中央亞西亞から諸方に擴がつて居たが、今女神が移された肅慎は黒海西北部の肅慎でスキシン Ecythien の地名が肅慎の發音と意味とを表はして居る。(従來の東洋學者等は、東方肅慎の土地のみを知つて、西方肅慎であることを知らぬから、東洋研究が少しも發展し得ぬ)。

此肅慎の發音は希臘語であるが、後代之れが羅典語で表はされて、同じ意味の「リゴール」Rigor を語源とした名稱で表はされて居る。即ち後代の地圖には黒海東北岸、ドン河の左右に、Utlu-Riguri と Out Riguri の二種族の地がある。Riguri は嚴格謹慎を意味するのである。又是等の地の總稱の別名を Ba Sarnae と云ふが、之れも英語等の Stern 嚴肅を意味する語であつて、凡てニッフルハイムの謹慎に當つて居ることを示して居る。是等は地獄女神のニッフルハイムの一一般の研究であるが、尙ほ詳細に、其九つの領土なるものを研究すると、益々面白い結果を得る。

**女神の九領土**——地獄女神のことだから、素より美しい愉快なものゝ有るべき筈は無く、全く其反對の不淨や苦痛に關した地名の其れと考へねばならぬ。神話には九つの領土の名は出て居らぬが、新研究者の着眼と知識と地圖とに依る時は、九つの領土の名も明瞭にする事が出来る。研究の着眼——には何を以てするか。佛教である。佛教に五不淨、四苦、八苦なるものがある。今五不淨を一つと見て、其れに、生、老、病、死の四苦と、愛別離苦、恐僧會苦、求不得苦、五蘊盛苦の四苦を加へると九つとなり、之れがヘラ女神の領土で、又南露西亞、小露西亞の地名であるのは何の不思議も無い——地圖を見て、其れを譯せば知れる事である。

神話には、ヘラ女神は自分の領土に老、病、死の者を受け入れると云うてあるが、之れに生苦なるものを加へると四苦が出来る。請ふ現代の露國地圖を繕いて、南方露西亞、小露西亞の部を見よ。然し、一々其語學的説明を試みると冗長になるから其れは略して表にして示す。先づ始めの四苦は、ナルガ河方面から西に向つて、

- (一) 生苦——ケルニコフ (Kherngof)
- (二) 老苦——ポーランド (Pole極)

(三) 病苦——キエフ (Kief=Give)

(四) 死苦——ウクライナ (Ukraina 希臘語源 Ugr-ain)

次の四苦は右四苦の南の地である——

(五) 愛別離苦——ケルソン (Kherson 希臘語源 Kheros)

(六) 恐僧會苦——エカテリノスラフ (Ekaterinoslaf 希臘語源 Ekate-ieri-nosleuf)

(七) 求不得苦——ポドリヤ Podolia (希臘語源 Pothos)

(八) 五蘊盛苦——ベッサラビヤ (Bessarabis 羅・希語源 Pessi-arabia)

以上が佛教に所謂四苦八苦なるものだが、尙ほ之れに五不淨なるものを一つと見て加へる。

(九) 不淨——ポルタワ (Pollava 羅典語源 Polluta)

是れで九つとなり、地獄女神の九つの領土は、南露西亞の是等の地と明瞭に知る事が出来る(因に云うて置くが、佛教は中央亞細亞から起つたもので、印度は其東流地に過ぎない)

**女神の宮中**——(南露の河々)——地獄女神の食卓は空腹、ナイフは饑餓云々の記事は、南露西亞ドン河以西の黒海岸の地名や河々の名となつて居る。之れも譯語説明は略して表にするな

らば、

食卓と空腹——スキタイ・レギイ（昔の地名）

饑餓とナイフ——スキタイ（昔の地名）

奴僕と遅鈍——ドン河及びスラブ民族名

侍女と魯鈍——ドネス河

関と懸崖——ドニイベル河

床、床虱、憂慮——バグ河

垂帳——ドニエステル河

燃ゆる火及び苦悶——ブレッス現名ブルト河

南部露西亞には、よくもく、此通り厭な名稱の付けられたものよ。憐れむ可し、露西亞人等は知らぬがほとけ、彼等はスラブ人スラブ人と平氣で自分を呼んで居り、露國をスラブ國など云うて威張つて居るが、スラブとは奴隸であり、又た魯鈍、遅鈍を意味し、河の名ではドン（鈍）、ドネスとなり、露國民族は魯鈍民族である。餘り威張つた名でもない。

匈俄利は亦餓鬼國であるのも面白い。

女神の宮城——は Kl-vidner で、其希臘譯はオデッサ（O-eidessa）舊名イチサンであるが、羅典譯をすると Ovidner 日本語の「お江戸」即ち喜見城又た境岡を意味する見事な綺麗な名であるのは不思議に思はれる。

「エッダ」が従来凡ての學者に信ぜられた如く北歐のものでなく、専ら亞細亞の神話であることを発表した物は本書が始めである。是等は、西洋のものと思はれた亞細亞神話を亞細亞に回収し今まで不明瞭であつた地理等を白日のやうに明瞭にしたもので、自ら世界の古代研究に貢獻する所あることを信ずるものである。

北人神話の中には、右に述べたる事件以外、尙ほ小さなものはあるが、其等は略することにする。希臘神話は西部亞細亞から其起源を發して漸次に南方の道を取つて東へ行き、印度から太平洋尙ほ進んで、亞米利加までも及んで居て、文明と、美との南方神話となつて居るが。北人神話は、其始めの部分は西部亞細亞から同じ起源を以はするが、中頃別れて北の方の道たる西伯利亞及び

蒙古方面を取つて、東へ進み、蝦夷的運動を以て極東まで行つて止まつて居る。そして其極東に行つた所で、南方から來た希臘神話と接觸再會するのはペレロフオーン神話とヤソンの遠征の歸り途の神話とである。されば希臘神話を大にし、太古世界の民族運動を知るには、又た北人神話を知る必要がある。

又ヘラ女神が極東韃靼から、南部露西亞に移されたとの神話は、極東と東歐との民族關係を研究するに非常に有益な材料である。

吾等は北人神話の新研究が、將來如何に東洋歴史と、東洋諸民族に、善良なる感情を興へるかを考へて、寧ろ愉快に感ずるものである。

吾等は嘗に西洋に傳はる北人神話のみを傳へて満足する者でなく、日本にも北人神話と一致して而も日本的に傳へた別種の北人神話のあることを世界の學界に報告するの愉快を有つて居る。それは竹田や近松等の作たる「奥州安達ヶ原」なる戯曲であつて、「エッダ」の神話と一致することを傳へ、又古代研究に於て「エッダ」と同等の價値あるものである。

附 録 二

日本戯曲の北人神話

— 印度、中亞、滿、蒙、西伯利亞舞臺 —

— 竹田、近松の「奥州安達ヶ原」 —

緒 言

新研究に據れば、全世界は太古盡く日本のものであつた。滿洲、蒙古、西伯利等は八幡太郎義家の征服した土地であつた。

今や滿、蒙、西伯利は日本の重大問題になつて居る。然るに其地の日本民族の太古史を明かに

する者が日本に一人も無いと云ふに至つては、實に悲しい事では無いか。此土地に就いて亞米利加や、英吉利の言ひなり放題に、惟命是れ従ふと云ふ有様では、果して八幡太郎に對して相濟むか。吾等歴史上の新知識を有するを以て任ずる者一言無きを得ぬ。重ねて云ふ——  
滿、蒙、西伯利は日本の領土であつた。

是れは吾等の歴史新研究の結論であり、又た吾等の論文の凡ての前置きである。此頃日本民族を世界的に研究する者が甚だ多くなつて來たのは實に賀すべきことであるが、其等の人々は遠觀的知識に乏しく、皆一局部的見解を以て日本民族を研究しようとして居るのは、眼界狭少の誹を免れぬ——抱負も學識も非常に小さい——それ故に僅かに朝鮮を研究した者は日本民族の諸關係を朝鮮ばかりで研究し、僅かに南洋を知つた者は、只南洋のみで直進し、僅かに滿洲蒙古等に縁のある者は滿蒙で日本を解釋しようとし、僅かに馬來方面に往來した者は馬來的に研究すると云ふ有様で、其材料も乏しく、見識も狭く、論理も整うて居らず、甚だ心もとない感じがする。

然るに最高學術の最高觀望臺から日本歴史特に太古の日本民族史を研究すると、日本民族は太古西部亞細亞、亞拉比亞、埃及方面に居て其れを畿内と呼び、「東」とは亞細亞の別名で、其南部の海岸諸國を東海道と云ひ、メヂヤ、土耳其斯坦、西藏、カスガル、スンカリヤ方面を東山道と云ひ、蒙古、滿洲及び其以東を陸奥と云ひ、西伯利を蝦夷と云ひ、北陸道をクルカの道と云ひ、黒海方面から露西亞西部西伯利を包み、歐羅巴地中海方面を西海道と謂ひ、アフリカを南道と謂ひ、亞米利加を常世國と謂うたのである。其れだから日本太古の民族史は此見解を以て研究せねばならぬ——「全世界は太古日本のものであつた」——現在の島國日本は全世界を箱庭的に縮寫して國土山川の名稱をそれ／＼寫し付けたものに過ぎぬ。

今此に論ずる滿、蒙、西伯利は日本太古の所謂陸奥及び蝦夷であつて、源義家や、安倍の貞任宗任などの戦争も決して現日本島國の事件ではない。それ故に前九年戦争でも、後三年戦争でも日本の地理に少しも合はぬ。そののみならず前九年の戦争地理地名と後三年の戦争地理地名とは全く異つて居て、益々日本の地理では研究が出来ぬことになつて來る。前太平記が義家を謂うて「斧鉞を執つて萬國に向ひ給ふに、向ふ所歸服せずと謂ふことなく」「武威を萬國に振ひ」など云ふは決して日本國內のことではなく、萬國が相手であつたことを示して居る。又は「前太平記」には「金」とか「伊具」(畏吾兒)とか、其他の不思議の名稱が澤山出て來る。又た其戦場の記事に「平

沙渺々として』の句が有るなど、決して現日本では無い地理である。又た敵の片耳を斬獲つて貯へ置くこと一萬五千など謂ふ事は元や蒙古のすることと同じで、若し嚴密に前九年役の地理を研究すると、全くそれはカスガル、スンガリイ、イリ等の土地であり、其「平沙渺々」の戦は全くスンガリーの廣大なタリムの砂原を云うたものである。然し、後三年役の地理は全く此地に關係なく、印度カルカタ方面に飛んで居る——是れで日本歴史なるものは寄木細工的編纂であることが察せられる。又た源義家（義経ではない）傳とジンギスクワンとの傳とは互に出入したものがあり、ジンギスクワン傳には又たアレキサンドル大王傳が出入し、アレキサンドル傳には日本武尊や、酒神バツカスの傳が出入して居り、又た其等名稱が互に對譯されることを一言して置く。

### 一 奥州安達原の戯曲

私は嘗て前太平記に據つて義家前九年の戦争に新研究を加へた。勿論日本の地理では如何にしても説明が出来ぬ。新研究の着眼を求めて之れをカスガル、スンガリー、イリ方面に得て其研究を進めると前太平記にある通りの地理で、日本では無い地名——書物の記事と合はぬ土地——も

盡く中央亞細亞では正確に存在し、方角でも何でも盡く書物と一致して居ることを知つた。所が今度竹田和泉、近松半二等の「奥州安達原」に據つて研究すると、勿論日本では無いが、又た前大平記とは地理を異にし、スンガリーよりも東の方蒙古、アムール、滿洲、西伯利・マリチメ、プロギンス、カムサツカ等であることが知れ、二つの書物の一致せぬことが、却つて吾吾に歴史地理の領土を擴張せしめることになつて、寧ろ愉快の感がある。

然し日本語と兄弟の希臘羅典語——而も世界の基礎的廣汎なる言語——の研究が無い現時の日本の學界に吾々新研究を發表しても、判斷者のない日本今日の學界には、猫に小判、豕に眞珠、盲目に鏡、又た行司の無い相撲の感がある。けれども學者たるものはそんなことに頓着する必要はない。自分は斯界に於て天下唯一のオーソリチーを以つて任ずるもの——無學者、且民族的抱負の小さい痿縮病者輩の批評は耳にせないでも善い。眞理は憚ることなくすん／＼述べる。

「奥州安達原」の劇は皆人の知る如く第一二段——安倍貞任宗任等が源氏に叛いて十握の寶劍を奪ひ、又た當今の弟環の官を奪うて秘かに奥州安達原に連れて行き、其所に奥州の内裏を作り諸人をなづける考であつた。朝廷は源義家に命じて寶劍の行衛を詮議せしめ玉うた。貞任は當時流

人の赦免された桂中納言則氏と偽つて都へ歸つて來た。第(二)段——宗任は前に義家が放つた禁獵の鶴を得たとの罪を自分で負うて縛られて、又た都へ入つて來た。彼等兄弟は義家に對して、怨が晴らしたかつたのである。第(三)段——義家の妻は儂仗直方なるものゝ長女敷妙と云ひ、貞任の妻は二女袖萩で儂仗直方は環の宮の保護掛りであつたにも係はらず、環の宮を何者とも知れず奪はれたのだから非常に心配して居る。娘袖萩は安倍家の離散から盲目となつたが、父の身の上を氣遣うて其子お君に手を引かれて秘かに父の家の近くに來る愁嘆場がある。第(四)段——は有名な安達原の一つ家で貞任等の母岩手なるものが中心となり、此所に寶劍と環の宮とが隠してあるのを、義家の計略で探り出し、寶劍を取りかへすのである。第(五)段——は小松の柵で貞任の最後である。

## 二 地理大観

劇の舞臺は決して現日本の土地では無い。第一段の義家屋敷や鎌倉の事は緬甸西海岸のキッタゴンで、希臘神話實は亞細亞神話の新研究に據ると、太古此地から平家即ちホイニケ—人種が世

界の四方に離散し、又は探檢したものとやうである。其離散の一部は東に出て樺太、沿海州の方面に根據地を作り、それから西に向つて内地の方に進入し、西亞細亞の方から東へ向つて來た同民族と連絡した形跡が見える。そして其一部がバイカル地方に滯留して居る事が、第二段安方町磯端の段となつて居る。然し此バイカルは緬甸ベンガル間の海岸地理を寫したものと察せらる。それ故に印度の地名と、バイカル地方の地名が混合して此一段の記事の中に出る。第三段の七條堤非人小家の段は印度方面の事だが、又た是れも西伯利方面に寫されて、環の宮御殿の段、袖萩祭文の段は、西伯利ヤクトスクと、沿海州と滿洲とになつて居る。第四段の道行千里岩の田帯白川關所等の記事は西の方中央亞細亞から東に向つてタルバガタイを通つて蒙古のガラタ山方面へ行くとで。安達原一つ家は蒙古のグングル—タ廣原の事である、第五段小松の柵貞任最後の段は、亞伯利の極端まで安倍族を壓迫すること、是れは西伯利の極東端からアラスカに跨つた記事である。此劇の地理大観は此様なもので、義家も妻の父儂仗直方も環の宮の御殿も、貞任も宗任も何時とはなしに印度緬甸から西伯利、滿洲、蒙古へ移つて居る。惟ふに民族の移住と、傳説地理の移植を此劇に表はし、此劇は又た其等諸地方の地理を説明して居るものであらう。さらば



此戯曲は今云うた土地の歴史地理或は地理歴史を知るには最も重要な書物と云はねばならぬ。最も日本歴史の年表などは後世歴史家が何か政治上爲めにする所あつての偽作が多いから容易に盡くは採用は出来ぬ。

### 三 桂中納言配流地——樺太

當時奥州に流人となりし者共二十七人を『常磐島、はだか島、竹の浦、松が浦』から赦免して都へ召還したとの事がある。此時の鎌倉や都は、今の鎌倉や京都ではなく、緬甸であること丈け一言して置いて説明は略するが、其等奥州の島々浦々は果して何處であるか——説明し得る人は有るまいと思ふ。此に所謂奥州とは日本内地の奥州ではなく、全亞細亞の奥州即ち西伯利亞であることは前に一言して置いたが、是等の島々浦々は今の我北海道、樺太、沿海州スタノゾイ山麓地方と、東蔡加とを謂うたものである。何故に常磐島が今の北海道であるか。北海道の札幌は希臘語 *Daplio* 語源 *Daplo*、日本語サホ、狹穂即ち樺で歴史上常磐 *Dacia* 御前の名を以て表はされる語の別譯だからである。はだか島とは樺太、其後半語フトは希臘語 *Buthio* で裸體を意味する

のである。竹の浦とは沿海州のスタノゾイ即ち竹を意味し、松の浦は西伯利東端ベールリングの地で、之れは英語の *Bearing* と同じく維持し、「待つ」ことを意味し、「松」と同じ語である。(西洋史家が、ベールリングの名は一千六百八十年和蘭の航海者ベールリングなるものが發見したから彼の名に依つて名付けたとは、例の西洋史家の誤譯で、それよりも前、太古から此名は有つたのである。)それ故に是等の島々浦々の地理は明瞭にすることが出来る。又た沿海州のマリ・チメなる名のマリは海、目、馬、梅を意味するから、此地は松竹梅の地名があると云うて可い。且つ最も注意して置くことは「梅」の語と其地名とである。何故ならば貞任を謂うて「我國の梅の花とは」この宗任の歌に關係があるから。

是れは奥州流人全體の地理だか、扱貞任が偽つて桂中納言則國の子則氏と名乗り赦免人の群に雜つて入京するが、其則國の配流されて居た土地は何處であらうか——サガリン、樺太である。希臘神話ヤソンの遠征の歸り途は、イル・ルリヤを通つて來たとあつて、イル・ルリヤは樺太に當り、其ルリヤはラウラと同語で、「桂」を意味する。「イル」は入るなり、納なり、中なり、故に

「中納言」である。又たサガリンのサガとは羅典語 *ofaga* で「教、則」を意味し、即ち則國、則氏の名は是れであることが知られる。

則氏は赦免になつたから直ちに則國の本官を繼いで桂中納言則氏卿となり、御裳束を參らせて「木綿の島守引きかへて冠裝束花やかに」の有様になつた。此に木綿の島守の形容があるが、素より流人の今までは木綿縞の衣服であつたらうが、之には又た地名が隠してある。何故ならばカラ・フトのフトは又た「綿」の意味があり、木綿類を「太物」と謂ふ、其フトの語はカラ・フトのフトで、彼れは木綿島（別名はだか島）の島守即ち樺太島に居たと云ふのである。又た貞任の妻の母儀仗直方の妻の名「濱木綿」も此カラフト即ち木綿島の地に當ることは後に述べる。

此に又北人神話——前回西伯利起原神話中に述べたことを引くが、樺太は「アングルボデイと云ふ女豫言者の土地で、彼女は死んだ」と云うてあることは、則國（豫言者同語サガ・リン）は死んだと云ふと同じである。此女豫言者はフェンリスの狼の母と云うてあることも記憶して欲しい。——此に尙ほ一言して置くことは、吾々の研究には北人神話「エッダ」が非常に重要な参考となることである。

#### 四 外の濱——バイカル湖畔イルクートスク

貞任は桂中納言則氏になりすまして都入りをした。弟宗任も亦義家に怨を晴らさうと思つて奥州外の濱で禁殺の鶴殺しの罪を負うて、縛られて都へ来る。外の濱は世界に澤山あるが、此外の濱とは何處であるか。

(一) 緬甸西南海岸 Chitagon も外の濱である。

(二) 日本本道北端、津輕の青森附近にも外の濱があり、ウトウ（善知鳥）神社は青森にあり、それ等の地はトマス・モーアの有名な理想國「ウトオビヤ」であり、

(三) 又た謠曲の善知鳥の地は阿弗利加東海岸のアビシニヤにもある。然し

(四) 今此に謂ふ所の善知鳥、安方の居る外の濱は、緬甸の外の濱を寫した西伯利のバイカル湖で、其安方町とはイルクートスクの事である。

バイカル——Baikal を西洋人等は Bicerkul と綴字を切つて「富める海」と譯して居るが、それは間違ひで、實は Baikal と切つて説明せねばならぬ。其 B は敬語「様」或は「宮」に

當りイグは希臘羅典語イグ 又たイグ 即ち「外」を意味し、イグ は海を意味し、バイカルは明瞭に外の濱を意味する。そして「外」を *Out* と謂ひ、之れが善知鳥の語源である。

イルクートスクが安方であるのは *Ir-Kut-sk* で、其イルは居、安を意味し、*Kut* は *Kutia* 即ち方ち方と同語源の變化であるから、之れも直ぐ夫れと知れるのである『善知鳥の宮、安方町』——バイカル湖畔イルクートスク——と『名も高き古跡は今に残りける。』

安倍家の舊臣善知鳥・安方が此處に住んで居る。彼れの妻の名はお谷であるが、バイカル(貝谷)の地名が又た谷(Tany)を意味する。彼れは岩城山の麓に獵をして居たが、其山は又たバイカル山で、希臘語 *Eusake* 即ち岩城と對譯される。

時に此外の濱に「お代官様」が通る。海女どもが「ざわく」し「もやく」して居る。「茂三の内儀」などの言葉や名が出るが、又た是れがバイカル關係の地名として出て居る。此湖水から流れ出る河はアンガラ河——エニセイ河の上流——で、希臘居 *Angara* は「代官」を意味することイグに異存は無イグ筈。湖水の東南岸に *Mysova* の町がある。之れはムサ、モサで「茂三の内儀」とあるは其地名である。モサとは「もやく」し、蒸すことを意味し、又た此地點に流れ込む薩露

哥河は語源 *Sole* 「やわく」することを意味し、此一段の書き出しの内に地名が説明してあることが知られる。

此イルクートスクの町で善知鳥・安方は義家が放つた禁殺の鶴を射て其足に附けてある金札を盗んだことは發覺した。彼れは捕縛されねばならぬ。其時外の濱の南兵衛なる「よつ程横へ太つた男」が来た、——實は彼れは安倍宗任の變装で、安方に取つて主人である。主従の名乗をして南兵衛は鶴殺しの罪を自分に負ひ、縛られて都く行き義家に怨を晴らさうとすることになつた——此南兵衛なるものは何者であらうか。

## 五 安倍宗任の捕縛——フェンリスの狼

——セーレンガ河——ノゾ・セーレンギンスク町  
——ヤプロノイ山

イルクートスク即ち安方町ヤサカタの方向にセーレンガ河が湖水へ流れ込む——是れは善知鳥安方の家へ南兵衛なる者がやつて来ることを作つたのである。何故ならば南兵衛とはノゾ・セーレンギン

スク或はセーレンガ河の別譯だからである。Selenga の語源は Seele 精霊、胸、宗、Enga 「任」を意味し、セーレンガは宗任を意味する。此河のバイカル湖に注ぐ少し手前にノヂ・セイレンギンスクの町がある。「ノヂ」とは若きを意味し語尾變化で Novum 即ち「南」となり、又た「若き」は小兒で、英語系の Boy, Boye 兵衛で、ノヂは南兵衛と對譯せられ、ノヂ・セーレンギンスクは南兵衛・宗任である。「兵衛」の語は必ず、Boy = San, Bon の語に當る翻譯例となつて居ることを一言して置く。然らばバイカル湖南方の地は宗任の土地と云うて可い。

吾等は前に北人神話を論じた時に、ロキなる者の子にフェニリスの狼なる者が有つて、之を縛るには鐵の鎖を以てしても蜘蛛の巢を破るが如くに破る程強力であり、漸くグレイブニルの紐で縛ることが出来る、そして此の狼の地は支那に所謂狼居胥山地方であることを述べたが、今この土地は又た宗任の土地であつて、宗任に在つても、彼れが鶴殺の罪を犯して縛られる時に「其縛何の是しき。譬へ鐵の鎖を以て繋ぐとも我爲にはわらしべ同然」と言うて居るのは、彼れは確かに「エッダ」に所謂フェニリス(鐵勒)の狼であることが知られるではないか。此の地は昔は鐵勒と云うたのである。特に東西史傳の比較研究上注意すべきことは、「エッダ」時代の神話には Oðin

(應神)なる神は最大の神で、フェニリスの狼の處分法を講じたのもオーデンであるが、日本では八幡神社は應神天皇を祭つたものと言ひ、今此劇では八幡太郎義家が、フェニリスの狼に當る宗任を縛らせた點などはオーデン=應神=八幡神=八幡太郎義家と明瞭な關係があることを示すものである。

宗任には——「肩口に二つの鷹、是れぞ聞き及ぶ目印、疑ひもなく、安倍宗任」であり、又彼れが縛られて都へ行き義家の前で、桂中納言則氏——實は兄貞任——が梅花一枝を出して「此花の名を知るか」の問ひに答へる爲め、近くにあつた矢の根を「口にくはへて我と我肩口つんざき」血汐の紅を以て以て白旗に「我國の梅の花とは」の歌を書いたが、是れが宗任地理イルクートスク地方であることを示すのである。イルクートスクはイル・クット・スクで簡単に發音すれば、イル・カタである。イル・カタのイルはアスと同語で、アス・カタ即ち安方である。語源 As-Kata の As 又 Aasa 即ち「鷹・肩」に當る語である。又其「カタ」なる語は英語 Cut と同じく、二つに分つことを意味し「鷹二つ」の形容が此處にある。然し、イル・クット・スクや、アス・カタ(ヤスカタ)や、鷹や肩の語源の説明は此に略する。

南兵衛の宗任は「よつ程横へ太つた」人間と云うてあるは何故か、パイカルのイカ即ち *ikaka* 又は *ikoko* は希臘語「横」へ延びることを意味し、日本語ヨコの語源であるから其形容があると知らねるばならぬ。此 *ek, ok* の語には又「他人に變装する」の意味がある。だから宗任は南兵衛なる不頼漢の姿で安方の家へ來て居る。實に戯曲の此際のあやや成り立ちを精密に知るには非常に語源學の力がなければならぬ。

貞任と宗任とは安倍頼時の子、有名な二兄弟。頼時の別譯は Galatia Ⅱ Galata で蒙古の此地方にガラタ山即ち狼居胥山がある。「頼」は百合で、譯語はガラ、ガウラとなるが例である。是れは頼時の位碑を祭つてある土地であることは後に説く。そして昔は蒙古方面を Ab-Sikythae と云うた其アビは蓋安倍の名であらうと思はれる。又此地方から起つて東北に互る二つの大きな山がある、即ち西部をヤプロノイ山と云ひ東北部をスタノヂイ山と謂ふが、前者は宗任山、後者は貞任山で——日本では太古傳説の蘇民將來、巨旦將來兄弟に當り、耶蘇教のアベルとカインとの兄弟の名を傳へたものである。

此ヤプロノイ山の語源は蓋 *Ablo-novoi* の變化で、アプロはアベルと同語又希臘語 *So-mene* に對譯せられ宗任を意味する。スタノヂイ *Stanovoi* 直立、貞固即ち貞任であることは譯解されるのである。そして貞任山即ちスタノヂイ山は蒙古方面から東北して西伯利亞の東端プリモールスカヤまで連亘して居る山で、此戯曲の地理研究の向ふべき方角に指針を與へて居る。

## 六 「我國の梅の花」——沿海州プリモールスカヤ

貞任も桂中納言になりすまして都に入る、宗任も縛られて都へ來た。義家の館へ桂中納言貞任も來て、一枝の梅の花を差出し、之れは何だと宗任に言うた。宗任は「我國の梅の花とは見つれども大宮人は何と云ふらん」と歌もて答へた。梅は花の兄、花の魁、本國奥州の兄、桂中納言の妾の其人は貞任であることを寓言したのである。

前にヤプロノイ山とスタノヂイ山と——スタノヂイは貞任山と云うたが *Sta-novoi* は明瞭な羅典語「貞任」であるには苟も羅典語を知つた者には疑問を介む餘地がない。然らばスタノヂイ山地は貞任を代表する土地と見て可いと斷言が出来る。其地の沿海州の北部を *Primorskaya* と云ふが、首相を意味し、始めに開く、始めに見るを意味し、梅は花の魁、花の兄の名に當り、

又目、見る等の語は梅と同語源であつて、歌の『我國の花』——貞任はスタノダイ山地方プリモールスカヤであることが知られる。

尙ほ此人名地名關係は、貞任の妻の父なる倭杖直方、母濱木綿、妻お袖、娘お君の研究に於て組織的に證明せられて来る。

### 七 倭杖直方の邸——アムール州及び

#### マリチメ・プロギンス

前にも言うた如く滿蒙西伯利は勿論日本の領土であつた。人は是等の土地を論じたり、説いたりするに、全く外國として扱うて居るが、吾等は始めから之を日本領土として扱ふ。人は外國人の記述や、旅行記や、歴史に據つて解釋をするが、吾等は日本文學をオーソリチーとして研究し解釋し、説明する。日本の學者には此見識と氣概がなければならぬ。

○前段の研究を承けて吾等の議論の土地は亞細亞極東北の滿蒙及び露領沿海州に來て居る。

○阿倍貞任の妻の父、平ノ倭杖直方は、環の宮の行衛を尋ねて、其始めの家から他の地方に移つ

て『老の忠義の一筋に、竹の園生の傳も、つもる白髮に雪折れて、妻の濱木綿只二人の夫婦の人なんいまそかりける』の住宅。

此倭杖直方の住宅は何處であるか。アムールやマリチメ・プロギンス即ち露領沿海州がそれである。「アムール」の國名の意義は羅典希臘語 Amator 即ち「天見る」で彼れ倭杖の『竹の園生の傳』『忠義』たることの意味は此に存する。此下半語 or は希臘語見るを意味し、其インフレクションは Omma 海、馬、梅、目、見る等の廣い意味があり、昔の肅慎國 (Skychien) の一つで、別名を「馬」と謂うたに由つても其語源を證明することが出来る。又た沿海州の Mari-time の語幹 Mari は (= Mare) 羅典語「海」を意味するが、海、馬、梅、目等は皆同語であることは前に言うた通りであるが、英語で馬を Mare と云ふも同語で馬の國、海の國、梅の國も皆同じであり、其語源を證明することが出来る。倭杖とは希臘語の Kenteo の發音字で、又た同じく「見ること」又た馬の刺棍又は馬鞭を意味し、アムール、肅慎、馬と對譯される人名である。彼れの名直方とは今のアムール州の北境 Jugur 山、希臘語源 Zug-dure の譯名「直」と「方」とは此山の名に存して居る。

彼の妻『濱木綿』とは何であるか——樺太のことである。木綿とは文字通りのものめんであり、カラフトのフト (Pulho, Butho) は太物の太即ち綿を意味し、前に桂中納言の流されて来た木綿島とは矢張此島であつて、アムール、沿海州に添うて樺太島のあるのを夫婦に見立てた小説で是等二人は北人神話のロキと其妻アングルボデイに當つて居る。

平の倭杖直方と、妻濱木綿との土地は明瞭に此に讀むことが出来たが、尙ほ此邸即ち土地に關した娘袖萩、其子お君及び貞任其他の人名、事件等を此土地に系統的集團と爲さしめて、吾等の立論を一層瞭明に證明することにしよう。——平即ちヘイ氏は Phenicia 民族で、平家に對する源氏は希臘民族であることを重ねて一言して置く。

### 八 直方の二女敷妙—Skythae—肅慎

倭杖直方の二女敷妙は八幡太郎義家に嫁した。昔此アムール方面を肅慎と謂うた、之れは西洋字で書くと Skythien で別の書き方ではシキタエ Skythae である。此敷妙が義家の使者として倭杖直方の邸へ来る。義家は素より現島國日本に居たのではなく、中央亞細亞方面から東向して

居る、太古の神話的個人か、人種名である。其妻敷妙は中央亞細亞、東部歐羅巴から東へかけての太古の有名な民族名で、地圖にも明瞭にシキタエと出て居る。されば此女性たる肅慎は西部亞細亞から東向して——即ち八幡太郎の使者として——極東アムール方面へ来たものであることが察せられる。

其時倭杖直方は『立つて一間の内柳箱に飾つたる旗と思しく、携へ出で』た。かの倭杖直方はアムール沿海州の地を人化したものと考へると、此『柳箱』とは何であるか。之れは遼東の邊疆を謂うたもので、此邊疆は英語地圖にはウイロウ・パリセード Willow Palisade と書いてある。柳條邊疆、柳箱又た柳箱を意味するのである。そして其柳箱の中の旗は『神前に飾り置かれた』。其神前とは蓋奉天府であることは此他種々考證されるが説明は略して置く。

### 九 袖萩祭文—ヤクートスク州オメコンスキ

倭杖直方は預かつて居た環の宮の行衛を失うて心痛して居る。娘敷妙も来た、八幡太郎も亦来た。宗任も捕へられて居る。貞任は桂中納言になりすまして此館へ来て居る。——倭杖直方は非

常の心痛。其處へ邸の外には『只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは血筋の縁、不便やお袖はとぼ／＼と、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を子は親を、走らんとすれど雪道に力なく／＼たどり来て垣の外面に』来て居る。

直方の邸はアムール州と沿海州である。其西北は西伯利のヤクートスク。ヤクート(スク)は羅典語アクト(Acutus)の變化「見る」と「苦痛」との二つの意味がある。お袖の名は羅典語、英語等の Senti, Send, Sende, Sound, Sowoden 等の變化 Sode に當りヤクートスクの別譯である。「萩」とは Phagi 廢物を意味し、萩袖とは盲目を意味するから彼は盲目である。其れが地名となつて居るのはヤクートスクのインヂギルカ河で、其語源は羅典語インヂゲレ Indigere である。娘お君の「君」は其東のオモロン Onolon 河の名になつて居る。語源は希臘羅典語の舊意義で、玉子のキミを意味して居り、又た其河の上流地たるコルムスキヤ Kolmskiya 山や、其河の西の枝たるコルマ Kolyma 河も亦羅典語コロ Colo「君」を意味して居る。さらば盲目の萩袖と娘お君とはインヂギルカ河とコルマ河、オモロン河とを謂うたもので、此二つの河は源を沿海州のスタノダイ山から發して居る。其れ故に此河を遡ると儼杖直方の邸たる沿海州の庭前へ來ると

云ふ形様になる。

父儼杖直方は心痛して居る。萩袖は『身にこたゆるは血筋の縁』で、其父の邸の庭前に來た。前に言うたインヂギルカ河の上流にオモコンスキの町がある。語源は Omo-ekon-ski で、『血筋の縁で來た』を意味する地名である所から此小説は出來て居る。お袖は此町へ來たのである。

オモコンスキの町から東にはスタノダイ山脈が互り西の方へはフェルコヤンスキイ山、オルガン山脈が續いてアムールや、沿海州の境となつて居る。

是れが儼杖直方の邸の庭の竇戸——鐵の門で、スタノダイ山の語幹 Oto は竇戸である。西に連るフェルコヤンスキイ山は語源羅典語希臘語フェルコアン Ferr-khoun で鐵垣山を意味する。其所でお袖には『此垣一重が鐵の門より高う』の歎がある。此山の北部を Or-ulgan 山と謂ふが、其れも英語 Ore「鐵」を意味する語と希臘語 olkan「門」とから成立つ語で、又た鐵の門である。其れ故に此フェルコヤンスキイ山から東部一帯のヤクートスクは袖萩の土地であることが知れる。

此邸に桂中納言の貞任も來て居る。貞任はスタノダイ山の名と同じである。宗任も捕へられて



居る。バイカル方面のフェリスの狼として捕へられて居る。「吾國の梅の花とは見つれども」とはプリモールスカヤ即ち Prim-or-skaya と切つて譯すると「吾國・梅の花・見る」の意味があり（又大目付とも譯す）其地にスタノゾイ山即ち貞任山があつて、歌の隠語は明瞭に解かれる。さらば戯曲の袖萩祭文の段の人名地名、事件等は盡く滿蒙、沿海州、ヤクートスクに系統的に集團したと謂はねばならぬ。そして其れは其理由が有るからである。

此邸で八幡太郎義家は「奥州の夷、安倍貞任に見參」し、捕虜を宗任と、桂中納言を貞任と看破し、而も今一度之れを赦免し、妻子兄弟の名乗を爲さしめ、再び戰場にて男らしく勝負を決せんと「おさらば」と敵味方に別れた。

以上述べた所に由つて、始めは善知鳥安方のバイカル湖、宗任のヤプロノイ山地方を説き、今其東部の滿蒙、沿海州等一帯を説いた。此沿海州方面と「印度日本」との交通は東方の陸地と海とからしたものらしい。

然し十握の此寶劍は未だ発見されぬ。吾等は八幡太郎と共に其穿鑿に苦心せねばならぬ。——果して此寶劍は世界の何れの部分に隠して有るであらうか。竹田、近松等は明瞭に其れを教へて

呉れる。印度から西へ向き、北に折れてカスミル、フェルガナを過ぎ、東に折れてスガリイ等を経て蒙古に行くと共に奥州安達ヶ原がある。其道筋は「道行千里の岩田帯」の段に「其こし方の通ひ路は」と説き始めてあるから、吾等は其古代の通路に由つて研究を進めよう。

## 十 緬甸、印度よりカスミル經由タシケント

### まで——歷山王遠征路

八幡太郎と、其研究者たる吾等は環の宮の行衛と十握の寶劍の行衛とを探し出さねばならぬ。「奥州安達ヶ原」を讀むと、陸奥安達ヶ原に其れが隠してあるとのことだが、現日本では殆ど無意味の地理であるが、此劇の道筋は果して如何になつて居るか。

劇の舞臺は始めに返つて、鎌倉から説き始める。鎌倉は緬甸西南海岸、カルナフリ川口の Chitagong である。環の宮は此地で奪はれた。其時にお付きをして居た匣の内侍と志賀崎生駒之助なるものがある。環の宮は匣の内侍と共に阿倍貞任系の者の爲めに誘拐されて何處とも知らずなつて仕舞うた。美男子志賀崎生駒之助——義家の郎黨——は傾城戀絹なるものと關係が出来て義家

の家から追放されたが忠義は忘れぬ。主人と共に寶劔の行衛を尋ねる志で、戀絹と共々流浪して藥賣の姿で陸奥まで行くことになる。此陸奥とは現日本の陸奥ではなく、大亞細亞の陸奥で中央亞細亞、亞伯利である。

緬甸の鎌倉キツタゴンから陸奥たる蒙古へ行くには如何なる道をたどる可きか。「奥州安達原」の戯曲は、吾等に其道を教へ「其こし方の通ひ路は」と書き始めて、太古の交通路を教へて呉れる。此戯曲の世界太古史上に非常に價値あることは、此一段の記事でも知れる。——其文章は

「其こし方の通ひ路は、花車のかけ橋渡り初め……………印度河上流ヒパシス河  
生駒の手綱せき止むる轡の關を打越えて……………アドラストアイ  
今は夫婦の藥賣……………マルスタラ

わらじに隠す……………ヒダスベス  
八文字……………エツチ・ドアブ

おろせ頼まぬ、日傘さして……………ベシヤワル  
行衛は陸奥、陸月に出でし都の空……………コーフェン河

谷の初聲聞きそめて、彌生は花の生れ月……………サンドロフ・ネ(印度河上流)

うしや櫻の顔隠す……………ドラブ・サカ  
霞を……………カスミル

拂ふ春風を、仇とは誰が言ひそめて……………アオルノス  
草のはつかに解く紐の……………ザリアスバ(バクトリヤ)

結ぼれ合ひし朝寝髪……………サマルカンド  
しんきらしいも命かや……………クレ・エスカタ

人目堤に……………トカリ  
荷をおろし……………タシケンド

家傳葛城神靈丹御用はござんせぬか……………アレキサンドリヤ・エスカタ

今極めて簡単に之に説明を下して古代歴史地理を研究する人の参考に供する。然し餘りに専門的

になる事は略する。「花車」とは印度河上流ヒパシス河、渡り始めを意味し、アレキサンドル遠征

の最も東の地點である。轡の關とは尙西北カスミル一帯を昔は Adrastai と謂ひ、轡を意味する

土地である。そして是から以後の路は歴山大王遠征路を西に取るのである。「藥賣」とは今のブ  
ンジャブ地方昔の Marusthala (Ma-rusthala) で「眞・藥・賣」を意味する土地。「わらぢに隠す  
八文字」とは印度河上流の Hydaspes (Hyd-aspes) 川で、「隠す・わらぢ」を意味し、八文字と  
は其地方の現名エッチ・ドアップ即ちエッチは英語系 *Hydris* の變化即ち八の字である。「おろせ、頼  
まぬ、明傘として」とは現名 Peshawar で希臘羅典語合成 *Pai-scia-war* 昔の名 *Pencilactis*  
(*Pai-oculactis*) 『おろせ頼まぬ・日傘さす・吾れ』を意味する土地。「陸月」とはカブル方面から  
印度河に流れ込む Kophen 河で、之れは希臘語。羅典に譯すれば *Mutus* 即ち陸月である。「彌生  
は花の生れ月」とは印度河上流の舊名サンドロフアネ (*Sand-oro-phanai*) の意味。「櫻の顔隠す」  
とは昔の *Drap-saca* (*Drapo-Sacra*)。『霞』はカスミル。「拂ふ春風」とは其北の *Aornus* の譯。  
『草のはつかに解く紐の』とはバクトラ昔の別名 *Zaria-spa* (希臘語 *Za-ari-aspa*) の譯。「結ばれ合  
ひし朝寝髪」とはポリチメトス河のサマルカンドの譯。「しんきらしいも命かや」とはアレキサン  
ドリヤ・エスカタ又はクロー・ポリス今のコーカンドか。「荷をおろし」は *Tashk-end* 即ち英語系  
の *Task-end* 業務終りを意味する地、此の地の古代名稱をアレキサンドリヤ・エスカタ即ち

歴山 最終地の意味である。「歴山」は日本古典に必ず「葛城」と譯してあるは、翻譯例である。  
其「エスカタ」を神靈丹と譯したものである。

されば生駒夫婦の藥賣は緬甸から恆河の方へ出で、アラハ・バッドを通り、印度河上流カスミ  
ルから歴山大王遠征路を逆に西に取つて土耳其斯坦へ出で、サマルカンド、コーカンド、タシケ  
ンドへ來たのである。

## 十一 白川の關——シルダリヤ上流タシケトン

藥賣生駒之助の女房戀絹がまだ鎌倉(緬甸)に居た時分に横戀慕をした瓜割四郎なるもの、何時  
しか白川の關所の首領になつて居る。生駒夫婦は白川の關へ來た。「東山道の國の果、白川の關守  
は瓜割四郎、一人權威をつく棒、さす股、琴路に通ふ雁さへ、赦さぬ道の關の戸は嚴重にこそ  
見えにけり」と云ふ有様。此處へ生駒之助と戀絹とが來たが、瓜割四郎は豫てから戀絹に横戀慕  
して居る所から、直ぐ戀絹を認め、「そもし許は何時までも留める、生駒之助には用はない、戀絹  
置いて早く通れ」と云ふ無體の振舞。そこで生駒之助との葛藤が起り、瓜割四郎は散々の目に會

ひ、生駒之助夫婦は關所を通り抜ける。

そも此白河の關とは何處であるか。素より此東山道は大亞細亞の東山道を謂うたので、現日本の東山道ではない。シルダリヤ河上流のタシケンドが白河の關である。此都市の東一帯の山地を又た Kendir 山又は Urtak 山と謂ふが、是れが瓜割四郎の關所の名である。此關所は『つく棒、さす股』とげくした形容の地、之れを希臘語で Kentaur と謂ふが、其訛りがケンチールとなつたもの、又たウルタクとは Urtak で、其上半語ウルは「瓜」であり、タクは英語 Tack と同語で割るを意味し、ウルタクは瓜割たるものが讀まれる。其名四郎はシル・ダリヤの語源 Siro である。其處で瓜割四郎の白河の關とはウルタク或はケンチール山麓、シルダリヤの上流タシケンドであることが知られるのである。

## 十二 アンボンタン賣とボツカラ(バツカカ地)

瓜割四郎が生駒之助に散々な目に逢ひ、身體不隨になつて居る所へ「アンボンタン」なる藥賣が來た。アンボンタンとは日本俗語馬鹿の異名。此地の西方一帯をボツカラと謂ふは酒の神バツ

カカの地たるバツカ・アラ即ちバカの地を謂うたものと察せられる。若し其うでないとするれば、シルダリヤの別名をヤクサルテスと謂ひ、ヤツクス・アルテスで、ヤツクスは又バツカ神の別名たる所から、此地名を人間として此に出したものと察せられる。又ヤクスアルテスは藥師を意味し、藥賣がしきりに此地に來る理由があるやうに見える。此地を又藥師寺とも謂うてある。

尙ほ此一段の地理がシルダリヤ地方であることは瓜割四郎が戀絹を口説いて「只居より四郎ちや〜」と云うた言葉が其を示して居る。思ふに「只居」とは英語系 Dedeje の發音の地口で、之を希臘譯する時はキルギス Kinkos となり、下駄及び桁を意味する所から察すべきである(東京で下駄直しをデディ屋と謂ふは此語である)。そして是れは生駒之助夫婦は其れから何れの方角へ行つたと謂ふに瓜割四郎が戀絹にふさげる時の形容に「恥を恥とも思はぬ赤頬、抱き付いたは山蜂が花の露吸ふ如くなり」とある文句で、彼等はスンガル方面へ行つたことが察せられる。何故ならば山蜂は蓋日本語スガルで、之れがスンガルとなつたもだからである。思ふに生駒之助夫婦は天山北路を取つて昔の「絹商」を通つて目指す所の蒙古—陸奥安達原—へ行つたものゝやうである。

### 十三 生駒之助夫婦とイスセードン

#### 絹商通路

生駒之助夫婦の名は中央亞細亞から東部の古代名稱となつて居る貴い名である。此戯曲「道行千里の岩田帯」の始の部分に、夫婦の道行を形容して「文使」と謂うてある。文使の發源地點は緬甸のキツタゴンであるが、指て行衛はモンゴルである。モンゴル Mon-gol とは「玉章」を意味する國名である。中央亞細亞から蒙古方面一帯を昔は Issedon-Seythia 又は Issedon-Serirka と謂うた。其れが生駒之助は「井筒にかけし生駒様」——井筒と比べ來し、丈の長さの同じことを意味する人間。同じ丈を希臘語 Isaedon と謂ひ、中史亞細亞の「イスセイドン」の地名は此男性となつて居る。又た戀絹は Serika 「絹」を意味し、此地方の大總稱を Seythia と謂ひ、スキ即ち「好き」及び戀を意味し、「スキチャ・セリカ」が戀絹と譯されて、此夫婦の名は見事中央亞細亞の古代名稱に印象されて居ることは、如何なる歴史家、語學者と雖、否むことは出來まい。

### 十四 安達原一ツ家——蒙古ガラタ山——其一

#### 東方の入口

奥州安達が原の一ツ家には鬼婆が住ん居で、路行く人を宿めては金錢を奪ひ、生命を取る。此婆は何ものであるか、又た其地は何處であるか。今研究の結果を先づ此に報告すれば、此鬼婆なるものは、阿倍貞任宗任等の母岩手なるもの、即ち阿倍頼時の後家である。彼女は十握の寶劍を盗み取つて之を隠し、環の宮も之れを此地に隠し、源氏に叛いて旗を擧げて天下を取る考へで、種々心を碎き、軍用金を作る爲めに旅人の金品を奪ふのである。土地は蒙古のガラタ山——バイカル湖から南の方角に當つて居る。之れが一ツ家の所在地のある。

前に説いた如く、外の濱南兵衛實は宗任の地は、バイカル湖南方一帯の地、其ヤプロノイ山は宗任山である。東に續くスタノヂイ山は貞任山であることを知つた以上は、其一族等が此附近に居ると察すには、十分道理があるではないか。

前に生駒之助と戀絹とは、西の方スングリイ方面から蒙古へ入込む路を取つたが、又東の方滿

洲方面からも入込み得るから、其記事も此戯曲に精しく出してある。

或夕方一人の旅人が此一つ家へ煙草の火を借りに来た。老女は鑿をくりかけて居たが其手を止めて用事を問うた。旅人は「急ぎの爲替銀、福島まで持つて行く者」なることを語つた。老女は銀が欲しい。旅人を引留め銀は自分が預かると云ひ、預けぬと謂ひ、老女は旅人の腕を握んで離さず、旅人の片手は門口の柱を抱いて支へたが餘り強く引くので、旅人の腕は財布を握つたまま抜けた。老女は旅人の喉へ喰付いて殺し、財布を取つて腕ぐるみ苧桶の中に入れて置き、死體は疊を上げて床の下に蹴落した。

此記事は蒙古と滿洲との境の呼倫池と、アルグン川と、ケルルン川との事を小説にしたもので曩きに「西伯利起原神話」を書いた時に、フェリスの狼が、軍神の片腕を喉に差し入れしめて、其れを喰切つたことを云うて置いたと同じもの、又た同じ土地である。即ち克魯倫川は「腕切り」川を意味し、此川に克魯倫の川があり、一名を「Dito」と云ふは財布を意味する、呼倫池は「口」を意味し、其南の Muktur 山は希臘語源 Mukter と同語で、血を「吸」ふことを意味する。

かの旅人は福島へ銀の爲替を持つて行くと云うて居る。アルグン川の希臘語源 Argon は白、

白銀、及び白髪を意味し、是れが銀の爲替でもあり、又た老婆の白髪の形容にもなるのである。そして此川に行くべき方角は呼倫池から北へ流れて居る所から考へ、又た金錢關係や福島の名の福得等から考へ、又前に抜けた腕が依然財布を握つて居るとの記事から克魯倫即ち腕抜けの名を負うた町の別名を Dito と謂ひ、其語幹 Di は得る、利得 || 福を意味するを基礎として考へると、此アルグン川附近にはウルを語幹にする地名は甚だ多い。ブイル湖の東南に Driy の町があり、アルグン川がオノン川と會流する其南方に Driovskoe の町があり、其北に Urim-Kanskoe の町がある、旅人が行かうとして居た福島とは果して何處であらうか。思ふに右ウリウム・カンスコエの町が其れのやうである。何故ならば「ウリ・ウム」とは Dri-um 即ち福島の譯が付くからである。(或はハルビンか)。

## 十五 安達原一ツ家—(其二) 西方の入口

大前髪の若い男が、一人の娘を、送つて上げると言うて跡を付けて来たが、娘は一ツ家に入つて出て來ぬ。大前髪は娘を釣らうと思つたら、反つて娘に釣られてだまされたと云うて、何思ひ

けん一ツ家の裏の藪垣押分けて忍び入つた。老女は又た絲を『篋にくりまく総車』を始めた。又た此一ツ家の前には高燈籠があつて旅人をおびき寄せるのである。

此『総車』の地は何處であるか、―思ふに蒙古東部車臣と書いてある所のやうである。人を釣る高籠燈とはバイカル湖へ流れ込むオルコン川の上流(南)に當る Dooon 即ち「人を欺き釣る」を意味する地名である。

戀絹と生駒之助とは旅路に疲れて、高籠籠を目當てにして、此鬼婆の一ツ家へ宿りを求めた。戀絹は妊娠して居る。夜中病氣が起り、藥を求めに行くと言つて老婆は戀絹一人を残して、生駒之助を連れ出した。其時老婆は戀絹に、決して閨の内を覗いてはならぬと言ひ置いた。彼等二人は歸りが遅い。戀絹は見てはならぬと言はれた聞かぬを覗いたら、體觸がある、逃げ退く拍子に苧桶に突き當つたら、其處には人の腕がある、驚いて表の方へ出やうとする。「後ろにすつくり白髪の婆」―生駒之助を出しぬいて、先へ歸つたのである。老婆は先づ戀絹の路銀を取つた。まだ實は孕み女の胎内の子の血汐を取つて、治療し度い病人を老婆は隠して居るので、妊娠の戀絹は殺され腹を割かれ、胎兒は取り出された。其血を手取早く用意の器に絞り込んだが、不思議にも、其

血汐の垂れは、以前の鬻體にしみ込んだ。けれども、表の戸を固く締めて急ぎ奥の方に忍び入つた。

## 十六 環の宮の玉座―オノン河上流

生駒之助は老婆に欺かれた事を知つて歸つて來たが戸は容易に明かぬ。戸をたゞき壊して内に入れば女房は殺され、子まで取り出して殺してある。生駒之助は大に怒り奥の方へ踏み込んで見ると『朱玉をのべた御殿、翠簾巻上げてたをやかに打ふし玉ふ稚宮、傍に従ふ老の身も、賤の姿を引き替へて十二單に緋の袴、白髪額をさげ髪や、敬ひかしづく有様に』と云ふ情態。これは奪ひ取つた環の宮の玉座である。老婆は奥州六郡の司阿倍頼時の妻岩手である。環の宮は此地に向の時から止聲病なる病にかゝつて物言ふことが出来ぬ。其れには妊娠の胎兒の血を用ゐたら直るとのことだ。妊娠の戀絹は殺されたのである。又其處に祭つてある頼時の鬻體に戀絹の血潮がしみ込んだのは此戀絹は實は老婆の娘であつたからとのことだ。戀絹の肌に着けて居た系圖書で知れたのである。匣の内侍も此に此宮に侍づいて居る、生駒之助も驚いた。

頼時の鬻骸は何處に祭つてあるか。直ちに知れる。此地の北方ガラタ山が其れである。語源 Galatia「百合・時」即頼時だからである。戀絹とは同血族。「同」を英語 Gam, 又は Game と云ふが其れが今の Shamo 即ちゴビ砂漠の別名で、サムの訛つたものである。——此地は昔のスキチャ・セリカ即ち戀絹の土地である。

生駒之助は驚いて居る。奥より匣の内侍は出で玉うて、前に絞つた戀絹の胎兒の血潮を器に盛り「二十日餘りの月影を移して用ふる此薬法。いで御薬を奉らんと、空にさへ行く月影を寫し取るよと見えけるが、何とかしけん、器はパツタリ谷底へ落ちて血潮に染なす岩角。こはそもいかに驚きながら見下す谷の岩間より俄かに渦巻く水のあし清々滔々と湧き上つた。此く産婦の悪血谷底に滴れば忽ち谷水巻上り土中の穢を清めるは、十握の御劍此巖中に隠して有るに疑なしと、女姿もいつしかに引きかはつたる變成男子、眉逆立つて目の内も、威あつて猛き其有様。』

あゝ凡て是等義家の謀略、環の宮とは實は義家の一子八若を以て環の宮といつはつたもの、匣の内侍とは義家の末弟新羅三郎義光であつて、全く老婆岩手を欺いたのである。

此に前きの大前髪の男も鎌倉権五郎景政「疾くより守護致す」と名乗り、小具足に身を固めて

八若を抱いて現はれ「我君の仰を受け、岩手と云ふ婆を釣りに此國へ入り込んだ」寶劍出して降参せよと喝破した。

さすがの老婆も驚き呆れるばかり、娘は自分が殺したし、是れまでの苦心も水の泡となつた。其時「阿倍貞任之に有り見参せん」と寶劍携へ、しづくとして出て、寶劍を新羅三郎に渡し、尙ほ戦場で雄雌を決しようとして別れた。

以上の記事に基いて其地理を研究するに就いて、先づ環の宮の玉座は何處であらうか。オノン河の最上流ガラタ山の西の Breven Kid である。元來環とは何のことであるか、從來手頸の裝飾と居るが、實は武裝的甲手、或は手袋を謂うたものである。今云うたブレベン・キツドとは羅典語、英語等の「若い山羊」を意味し、殊に Kid は手袋を意味し、即ち環——手巻——である。山羊は希臘語 Aigi で、其變化したものは英語 Fight 獨逸語 Acht で八を意味し、ブレベン・キツド即ち若山羊は若い幼い環の宮のこととなる。

環の宮は奥州へ下向以後止聲病となつたとのことはオノン河の名である。Onon は希臘語 Anon の訛り、無理解、無意味を意味し、止聲病と譯し、言語のないことを意味する川の名である。



匣の内侍は戀絹の血を器に容れて云々とあるが。匣や器は前のオノン河上流の東の川の Kutun の名である。クツンとは希臘語 Kydon の變化で、口、管、陶器、言、事等を意味する川の名である。

匣の内侍とは此地方の古代の名稱スキチャのことで、其スキなる語は日本語の「梳き」に當り、櫛で梳くことを意味し、玉くしげ化粧箱ともなる。此女性實は新羅三郎であるが、新羅とは希臘語 Seylla で同じく櫛で梳くことである。新羅をシラギと云ふ語尾變化 Seyllaoi である。老婆岩手の名は Tu-ade で、新羅と同意味の別譯に當るが説明は略する。

匣の内侍なる新羅三郎の持った器の血が谷底へ落ちるや否や、水は滔々と渦巻湧き上つて来たことは其クツン川が Sun Tore 湖へ流れ入ることである。スン・トーレのトーレは羅典語で「滔々と湧き上る」を意味して、別の羅典語 Sursi 即ち劍の意味となり、此段の記事と見事に一致する地名である。又たスン・トーレは希臘語 Syn-Spa と對譯され、其スペースシバートスカと變化し、又た十握と轉訛する語である。

此スン・トーレ湖はスタノヰイ山の西端に續いて居る。スタノヰイ山は貞任山であることは前

に言うたが、其れ故に貞任が十握の寶劍を携へて此場に出て來ると謂うてあつて、一是等の事は全然地理小説に仕組まれて居る。

此に鎌倉権五郎も來て居る——彼れは強力の男子である。此ガラタ山から南一帯をグングルータ Gun-guluta 廣原と謂ひ之れがゴンゴローの名、羅典語 Congluta 強固を意味し、鎌倉権五郎の性格を示して居る。

安原の入口から奥まで、又た此原に集まつた人々も之れを研究し、盡く地名人化であることを知つた。寶劍も手に入つた、環の宮の行衛も知れた。(ベレロフォン神話のアマゾン征伐の地に當る。)

## 十七 小松柵戦争——勘察加

源義家等は、安倍一族を西から亞細亞の極東まで追窮して居る。貞任等は小松の柵に據つて戦うのである。小松の柵とは何處であるか。

東察加は Kam-chatka で、上半語カムは希臘語 Komias で、シヤツカは英語佛語等の Chateaux

の變化で、城塞、柵等を意味し、東察加が小松の柵である（貞任は前から此地方の土地で）、樺太たる木綿島に居たこともあり、スタノゾイ山が貞任山であることは前に云つた。

義家と貞任とは東西より此地で出會うた。貞任は寶物を別條なく渡したから、義家も満足のことゝ「義家が首取つて頼時が冥途の妄執を晴らせ」と潔く言うた、貞任は有難しと、突立つて鞘口にはつしと義家の兜を打ち落とし、抜より早く我と我右手の小脇に突き立てた。宗任は此時以來義家の家來になつた。

貞任が義家の兜を打落したとのことも亦地理小説で、彼等は何れも亞細亞の極東に来て、押しつまつて居る。對岸のアラスカは古代交通が有つたのである。義家の勢力は尙ほ東へ伸ぶべきだが、大抵此で行き止まつた事になつて、其兜がアラスカとして表はされて居るのである。何故ならばアラスカ Alaska とは「凡ての頂上」を意味するからである。—アラスカは今や米國領であるが、太古は八幡太郎義家の領土の飛んだものであつたことが知られる。

日本戯曲に表はれた滿、蒙、西伯利舞臺は、實に此く廣大である。亞細亞全土は殆ど義家の領土であつたことを日本人は自覺せねばならぬ。大きい自覺は大きい活動の基礎を成すものである。今

の日本の學者で是れ丈の研究を進め得るものが一人もないことは悲しいことではないか。今日日本の學者も志士も大を好まないで、小を好んで居る。是れで日本の國力が果して大なることが出来るであらうか。

滿、蒙、西伯利一帶は八幡太郎義家の領土であつた!!! 是れを縮小した從來の日本歴史は盡く偽史に過ぎぬ!!!

附 録 三

プラトーンの神話

プラトーンの著書の中には、甚だ巧妙な比喻が澤山あり、又た一種特得の貴重な神話が多く傳へられて居つて、希臘神話を學ぶ者や希臘的氣分を味はうとする者は、亦決してプラトーンを忘れてはならぬ。今其比喻に屬するものは範圍外だから之は略し、其神話の形を取つたもの五ツ六ツを、極めて簡単に紹介することにする。

一 プロメーテウスとエピメーテウ

神々が世界の凡の動物や人間を創造して、プロメーテウスとエピメーテウスとの二兄弟に、其等動物や人間に、種々の性質及び能力を分配せしめたことは、希臘神話第一章世界始原神話の中に

一 プロメーテウスとエピメーテウス

述べて置いたが、之れはプラトーンの「プロータゴラス」篇拙譯プラトン全集第一巻に出て居るのである。前に述べたから、此には略する。

## 二 ヘーラクレースの選擇

ヘーラクレースが成長して、人生の岐路に来て、何れの路を取るべきか——快樂安逸の路か、節度、勤勞、勉強の路を取るべきか——に迷うて居た時、快樂の女神と、節度の女神とに出會うた話は、ヘーラクレース傳の中に述べて置いたから、此には略する。是れはプラトーンの書物では無いが、プロオチコス（道主義者を意味する）の書物に言うてであると、キセノフォーンの「メモラビリヤ」第二巻、一章にソークラテースの談話として出て居るものである。

## 三 空蟬神話

「空蟬の身をかへてける樹の下に」——時は夏の日盛り、ソークラテースは若き友人ファイドロスと共に種々の問題を議論しつゝ、河のほとりの樹蔭に来て息んだ。ファイドロスは聊か疲れ

て睡むけを催したやうである。時に蟬は樹の上に、しきりに鳴いて居る。談話の名人ソークラテースは話頭を一轉し、ファイドロスを勵まして言ふに「蟬は太陽の熱に浴して鳴き、き噪いで居る。若し我等、議論もせず、うとうととして居る時は蟬は上から我等を見て、果して何と評するであらう。我等は思ふだに餘り怠惰ではないか。我等若し盛に議論し研究する時は蟬は必ず我等に賞與を與へるであらう」と。ファイドロスは蟬が與へる賞與は如何なるものであるか、何等聞いたことがないと答へた。ソークラテースは一種蟬の眞話を語り始めて「音樂を愛すること、君の如き人は、必ず蟬の昔話を聞いたであらう」と云うて次の如く語つた。

「尚ほ人がらのなつかしきかな」——昔、ミュージズ等がまだ生れ出ぬ前に蟬は實は人間であつた。ミュージズが生れ出て、節面白い歌が出来てから、彼等は其歌を悦び、之れに恍惚として飲むことも食ふことも忘れて歌ひ楽しんだから、彼等はとうとう死んだ。けれども彼等は生れ更つて蟬となつた。これはミュージズの神達が、音樂を愛したことの報酬としたのである。是から彼等は飢ゆることなく、渴くことなく、生れた時から歌ひ續けて、食はず飲まず、死ぬる時は、此地上で崇敬した天のミュージズの許に行つて、地上の事を報告する。彼等の中舞踏に關して報告する

ものはテルプシコレーの愛を得、戀愛者に關して報告する者はエラトリーの愛を得、其他それ／＼崇敬の方法に従つて其他のミューズに事へたものは、又それ／＼のミューズの愛を得、哲學、音樂に關して報告する者はミューズの中の最も年長のカンリオベと、其次のウラニヤの愛を得る。何故なれば、此二つのミューズは専ら天に關し、又神々及び人間の思想に關したことを司るもので最も美しい音聲で之を語るものだからである』と云うて、フアイド罗斯を勵まし、『我等は絶えず語り續けて、日中でも午睡などをしてはならぬ』とのことを詢へた。「源氏物語」に

うつ蟬の身を變へてける木の下に

なほ人がらのなつかしきかな

の歌のあるは全く此神話に基いたもので、プラトーンの空蟬神話は印度から西に傳はつたもの、日本の源氏物語も實は印度の地理小説で、歌人蟬丸の地理は、此神話の土地である。思ふに印度ペンガル東部のチッペラー山地方のコムミラー（行くも歸へるも逢ふ坂）が其土地のやうである。（此神話はプラトーン全集の中の拙譯第三卷フアイドロス篇にある。）

## 四 愛の神の讚美

——プラトーンの「宴會」——

或時ソークラテースの若き友人アガトーンが、美文競技に一等賞を得て、其祝宴を開いた。席上或人の動議で、たゞ飲食するばかりは余り無意義であるから、來會者の席順に従うて廻し演説をすることを唱へて、人々皆賛成した。又愛の神は神々の中の最も古い神であるに抱はらず、未だ其讚美をした者が無い。就ては愛の讚美を今夕の演説の題として、各自順次に述べることにせうとのことで、第一にフアイドロスが、愛情は人に勇氣を與へるものたることを演べ、次にパウザニアスは戀愛に高尚なると、下等なると二種あることを語り、エリキシマツコスが、愛は天地萬物の調和、節制、秩序を爲さしめるものなることを論じた。次に滑稽家——

**アリストファネス**——は、愛を讚美する前に、先づ愛情の起原を説かねばならぬとして、神話の體裁を以て面白く次の如く語り始めた——

**原始人間**——元來性なるものは現在では男女の二性であるが、原始人間では男性、女性、男

女兼性の三性であつた。然し其男女兼性なるものは、今は「男女」(アンドロギノス)と云ふ名のみ残つて、其實物は絶えて居る。原始人間の身體は今の人間と全く異つて、球の形を爲し、胸も背も圓く、手は四本足も四本、頭は一つで兩面あつて裏表反對の方に向き、耳は四個ある、生殖は前後二つあり、其他之に準じて居た。其れ故に彼れ若し歩かうとする時は現在我等の歩くやうにすることも出来るが、若し大速度で歩かうとする時は手四本、足四本——足を逆か立て、車輪のやうに回轉つて行くことも出来る。そして其力は恐ろしく強く、又其思想も甚だ偉大で、神々に對して攻撃を加へる程で、其中オーツヤ、エフィアルテースの如き巨人は、ホメーロスの神話に言ふが如く、天に昇つて神々に反抗しようとした事もある。(此人間は日本書紀——)

仁徳天皇紀の飛驒の宿儺——と同じ人間で、天皇の六十五年の段の言ふ所に「飛驒の國に一人あり、宿儺と云ふ。其人となり一體にして兩面あり。而各相背けり。頂合ひて項なし。各手足あり。其膝ありて颯、踵なし。力多くして以て輕捷なり。左右に劍を佩き、四つの手並びて弓矢を用ふ。是を以て皇命に隨はず、人民を掠めて樂みとなす。是に於て和珥臣の祖、難波根子、武振熊を遣はして之を誅す」とあつて、プラトーンと同じ材料から出て居るものと思はれる。)

人間身體の梨割——人間は此く力が強くて、神々は甚だ困り入つて、其の所分法を攻究した。若し雷電で一撃すれば彼等を直に滅ぼす事は出来るが、其れでは神々に供物を備へ、奉納をする者が無くなるから、其うも行かすとのことで、遂にゼウスの考案に依つて、彼等を生かして置いて其力を削ぐには、人間の自體を二つに斷ち裁り、今まで四本の足で歩いて居たが、是からは二本の足で歩かすやうにし、又尙ほ神々に割して無禮を行ふ時は、又々之を半分に斷ち裁つて一本足でビヨビヨと歩くやうにしようとした。そこで人間を二つに割るとは丁度我等が果物を割るやうに、又毛筋で煮卵を切るやうに、一人づつ二つに割つて、アポローンに命じて顔の向きを振り曲げて、自分の斷ち割られた方を見る事が出来るやうにした。之は彼をして以前の事を想ひ出して謙遜の心を起さしめる爲めである。アポローンは醫術の神だから其斷ち裁つた部分を治療し、其部分の皮膚を引き寄せて囊のやうにし、其結び目を臍とした。アポローンは又胸の部分を作り、澤山皺のある所は、靴作りが靴型の上で鍔を以て其皺を伸ばすやうにし、尙ほ多少の皺や皺は腹や臍のあたりに残して置いて原始人間の變化の紀念とした。

半々相求む——人間は此く兩つに割られたから、半分同志は他に他の半分を求め、互に手を

懸けて相抱いて一つに爲らうとする。そして彼等半部づゝ離れて居ては何事もすることを好まず、飢と怠情との爲めに死ぬるやうになつた。若し其一の半部が死ぬる時は他の半部の者を求め、其半部は全男性の割られたものたると、全女性の割られた者たるとを問はず、彼は之を求めて相抱くやうになる。然し此うなるときは人類は絶えるから、大神ゼウスは之を憐れんで一の新案を考へ出し、彼等の生殖機を體の前面（裁斷された面）に置きかへた。生殖機は始めから、今のやうに前に在つたのではない。始め人間の種子は蠶斯のするやうに、之を地の中に生み付けたものだが、今からは人間互の身體の内に生み付けることになつた。

**是れ愛情の起原**——生殖機置き更への後は男子は女子の身體の中に生殖するやうになつた。これは男女相抱擁して生殖することが出来、以て人類の存在を繼げる爲めである。又若し男性が男性に合體することが出来れば彼等は満足安心して生活の途に進み得る（希臘古代には男性間の愛情が行はれた）。此の我等人間に扶植してあつて、互に相求め再び我等の原性を一致せしめ、二人一體となり、人間の狀態を恢復しようとする欲望の、太古以來のものたることは此通である。我等若し別々に在る時は、丁度人間の割符の如く、又一面のみある平魚の如きもので、常に他

の一半を求めて居る。

**男性同志の愛、女性同志の愛**——前こ言つた「男女」即ちアンドロギノスなるものゝ二に割かれて出来た人間は性質多淫で、多淫の男子、多淫の女子は通例此種の人間である。又女性の割かれて出来た女子は、男子を好まないで唯女子のみを愛する。男性の割かれて出来た男子は男子を好み、男性の一半である所から男子を求め、男子を愛する。そして此の種の男子は最も男子らしき性質があるから、小兒としても青年としても、最も良い者である。彼等若し或年に達せば青年を愛し、決して自ら進んで婦人と結婚して子を産むことを爲ぬ、たゞ結婚するは法律の命令に従ふばかりで若し結婚せないのですむならば、彼等は寧ろ其れに満足して居る。

此通り人性は原始の一つで宗全であつたが、二つに割られて半々となつたから、其原始の完全な一體に爲らうとする欲望を、我等稱へて「愛」と謂ふのである。

**又々半裁されん**——完全であつた原始の人性は、人間の惡に由つて神々に二つに割かれた。若し我等此後神に對して従順でない時には神は、現在の如き半裁された我等を又々半裁し——始めから謂はゞ四分にし——我等は丁度浮彫の如く紀念碑等に彫刻してある肖像の如く、たゞ鼻の

半面のみあるものゝやうに、又は翻符の一半のやのやうな姿になり、一本足でビヨイ／＼と歩かねばならぬやうになる。故に我等は人々に勸めて神を敬し、悪を避け、善を行はすやうにせねばならぬ。我等若し神を尊敬する時は、愛の神は我等を原始の状態に回らし、我等を癒やし、我等を幸福ならしめることを我等に約束し玉うた——以上はアリストファネスの演説である。次にアガトーンは愛を讚美して、

愛は——何時までも若き神、柔和の神、優美、正義、節制、勇氣、智慧、詩人、秩序、平和救ひ、最も光輝ある神なることを語り、最後に——

リクラテース——は愛の哲理を述べ、「愛とは或ものゝ愛であつて、自分に無いものに對する欲望である。故に愛は善でなく、大なるものでもなく、其れに對する欲望である。愛は美ではない、美に對する愛である。」ことを説き、自分は愛の名人たる事を述べ、愛に關してはデオチマなる婦人が自分の師匠であつたことを語り、彼女の教へた所であるとして述べて云ふに——

愛の父母——アフロヂテ女神の誕生日に神々の宴會があつた。其時明智を意味するメーチスの神の子ポロス一名豊富の神も其來賓の一人であつた。宴會終つた時ベニヤ一名貧乏の女神は、

例に由つて戸の外に食物を乞うた。豊富の神ポロスは神酒に酔うて、ゼウスの花園に行つて睡こんだ。貧乏の女神は其身の窮境を思つて豊富の神を夫にして子が得たいとの野心を起し、豊富の神の側に寝て愛を妊んだ。愛は自ら美を好むに因るとは云へ、又アフロヂテ女神の美しいと、又アフロヂテ女神の誕生日に生れたとの理由でアフロヂテの従者となり侍者となつた。其財産も亦其母の如く、始めは常に貧乏で、何物も所有することなく、たゞ人々の想像する如く、優しく美しかつたばかりである。其の容貌は荒れはて、汚穢に染み、歩くに靴なく住むに家なく、寝る時は青天井の下の地の上に横たはり、時には市に人の門口に息み、其母の如く常に不仕合の境遇であつた。けれども亦幾分父に似た所があつて何時も美と善とに對して野心を抱き、性質大膽冒險で、力強く、能く人を獵り、何時も或陰謀を企て、智慧を求めること甚だ鋭敏で、決して其方法に窮すことがなかつた。何時も哲學者であるが又た妖術者や詭辯學者の如く激烈である。彼は豊富の時には生きて榮えつゝあるが、又た他の時には死んで居り、又其父の性質あるが故に又た活動を始める』ことを言ひ、愛は美を愛するものなること、愛は生産であり、創造者であり、妊娠の神聖なる力であることを語り、美醜と生産力の關係を説き、愛は單に美のみでなく、美に於て生れ



ることの愛であることを言ひ、尙ほ進んで――

『愛』は不死の原理――であることを言ひ、(一)愛に由つて人間は生殖して子孫に生き、(二)大事業を行つて其功業に生き、尙ほ愈々進んでは(三)人體美より、文物制度の美に至り、遂には美の大海に近づき、智識の無限の愛に於て多くの美なる、高尚な思想及び概念を創造し、最後に絶對の大美に體達し、宇宙と合體して不死たらしめることを述べた。

アルキピアテース――ソクラテースの演説は終り、大に拍手喝采せられた。其時戸口に騒がしき物音し、ソクラテースの若い弟子たる美男子アルキピアテースは多くの酒飲友達や、藝妓等に扱けられて、歌と笛とに囃されて、蹣跚として室内に入り來つた。

アルキピアテースは大に酩酊して居る。人々は宴會はもう仕舞になつたことを言うた。然し廻し演説をすることが今日の定めだから、アルキピアテースも何か愛の讚美に就て一言せねばならぬ由を告げた。然しアルキピアテースは、ソクラテースの前で、ソクラテースに叱られるから、自分はソクラテースを讚美することを許して欲しいと言ひ、人々も同意し、それからソクラテースの體力上、智識上、徳性上の讚美をして、全く此宴會が終つた。ソクラテースは夜から朝ま

で本杯を傾けて門弟子のアリストデモースと二人とで飲み明し、朝になつて此家を辭し、途中でリケイオンの公園で水浴して、ソクラテースは自分の家に歸つた。(是はプラトーンの「宴會篇」の大意、拙譯プラトーン全集第二卷にある。)

## 五 エルの地獄極樂實見記

エルの話し――アルメニオスの子で、バンフィリヤ生れのエルなる者、戰場で死んで、既に十日を経過して、其屍骸は腐つて仕舞ふべき筈だが、少しも變化ないことが發見せられたから、人々は本國に其屍骸を持ち歸つて葬ることにした。彼れは十二日間此状態で火葬の薪木の上に横たへられて居たが、忽ち蘇生つて、他界に行つて見聞した事を物語つた。

審判――エルの言ふ所に據ると――彼れの靈魂は肉體を離れて群集と共に旅行して遂に一種不思議の場所に來た。此所には地の上に二つの穴が有り、又た是等の穴に對して天上にも二つの穴がある。其中間の空中には數名の裁判官が其座にすわつて、是等の靈魂に裁判を宣告し、然る後正しき者の類に其宣告書結び付け、命じて右の天上道から上らしめ、又た不正なるものも之

と同様にして左の下落道から降り行かしめる。

エルが裁判官に近づいた時、裁判官等は、エルは他界の報道を人間に爲すべき使者であることを命じ、其處で見聞さる可き一切の事を十分注意せよとのことであつた。

そこでエルは見渡すと、一方には多くの靈魂は其宣告を受けると、或者は天に向ひ、或者は地の穴に向つて出發する者がある。又た他の二つの穴には他の靈魂は、或は埃塵に塗れ、旅行に疲れて地下から出て來るもあり、又は清淨光明の身を以て天から降りて來るものも見た。

草場の會合——彼等諸の靈魂が此處に到着すると、皆喜んで一つの草場に行つて、相集まり、相識る者等互に抱き合つて談話し、地の中から來た靈魂は物珍らしげに天上の事情を問ひ、天上から來た靈魂等は又た地下の事情を尋ね、地の下から來た者は地下の旅行中に受けた事、見た事等を想ひ起して泣き悲しみ、上から來た者は天上の歡喜や、想像すべからざる美の光景を敘べた。

賞罰十倍——エルの言ふ所に據ると、未來世界の賞罰は、善にも惡にも十倍である。或靈魂が他の靈魂に問ふに「アルチアイオス大王は何處に居るか」と。此大王はバンフィリヤの暴君で、其老父を殺し、兄を殺し、其他無數の惡事を行つた者でエルよりは一千年前の人である。他の靈

魂答へて言ふに、「アルチアイオスは決して此處へ來ぬであらう。彼は無間地獄に墜とされた。此大王及び其他の暴君等も今一度上の世界に出ることが出來ると思つて居たが、地獄の口は彼等を通過せしめず、激烈な鳴動を起し、獄卒は彼等を捕へて、頭も手足も縛り、皮が剥げるまでに答捷ち、曳き摺り、荆棘の上を引き行くこと、丁度綿羊の毛を梳くやうにし、側に居た者に向つて彼等の罪を報告し、彼等は地獄に投げ入れられる者たることを告げた」と——是等は惡の報いであるが、善なる者の報酬としての幸福は又大いなるものである。

かの草場に集つて居る靈魂達は、七日間此處に逗留し、八日目には各その旅路に出立せねばならぬ。エルの言ふ據に據ると、其後四日目には彼等は天から來る光明を見得る場所に來る。其光明は柱のやうに直線で、全天全地を照らし、其色彩は虹のやうで、其光輝と純潔とは其れにも優つて居る。

其翌日の旅には、光明の中央に、幾筋となき天から垂れ下つて居る鎖の端を見得る所に達する。此光線は天の緯帯で、宇宙の周圍を維持して居る。そして是等の末端から「必然」の紡錘は延びて一切の廻轉を生ずる。又此天體の各所に相當の間隔を置いて妙音天女や「必然」の娘たるラケ

ジス、クロートー、アトロボス等は、妙音や音楽を以て此天體を廻轉らして居る。

**新生の選擇**——死んだ者の靈魂が、終にラケジスの許に行くと、通辯者があつて、人間の靈魂は新の生を得ることを言ひ、其抽籤で選擇ぶことを宣告し、籤を地上に投げて新しき生の種々の見本を示すのである。哲學を修めた者以外は、其選擇びには屢誤りがある。其選擇の有様は、悲しむべきもの、笑ふべきもの、又た驚くべきものがあつて、大抵前生の經驗に由つて其苦しみを避けようとして新生を選んで居る。音楽者オルフェウスは前生女子に殺されたから、新生には女性の腹から生れぬやうにと白鳥の生を選び、タミュラスは音楽的のナイチンゲールの鳥となり、アイヤコスは人間よりも獅子と爲り度いと思ひ、アガメムノーンは鷲の生を選んだ。最後にユリセースは、十分熟考の上、名の無い平民たることを選んだ。

**エル甦へる**——此して人々の運命たる新生は定まり、尙ほ其旅行を續けて「忘却」の野を過ぎ無念、無想の河に行つて、其河の水を飲んで寢たら（エルは此河の水を飲むことを禁ぜられて居る）、中夜に暴風吹き、雷轟き、地震があつて、彼等靈魂は、星が一時に諸方に散るやうに、種々の方向に飛び散つて、各方面に生れることとなる。死んだエルは何等の知ることなく、其朝目

が覺めたら、自分は火葬の薪木の上に横たはつて居たとのことである。（是れは拙譯ブラトーン全集第四卷「理想國」篇第十卷にある。）

（尙ほ地獄——無間地獄等——に關しては「ファイドーン篇」の終りにあるが、其れは略して置く。此エルの話も、ファイドーン篇の地獄地理も皆印度緬甸のことで、エルの話は馬來方面から恆河口のことである、ファイドーン篇の地獄地理は實は恆河口のことを大に變更して言うたものである。——それはブラトーンは印度神話や哲學が、西に傳へられて改作されたものであるから。）

## 六 アトランチス島物語

**ブラトーンに多謝す**——彼が不思議なアトランチス島物語を西洋に傳へて置いたことを多謝す。此島は萬事凡て整頓し、萬物豊富、人民皆幸福で、一種の理想郷の趣があつて、果して眞に存在した國であるか、或は無何有の國であつたかとの興味的疑問の島である。

**アトランチス島**——此此島は所謂ヘラクレスの柱と稱する海峡の正面に在つて、他の島國に行く途次となり是等の島々を経て眞大洋を取り繞いて居る反對側の大陸全體に渡ることが出來

る。かのヘラクレスの柱の海峡の内なる海は、たゞ狭い入口がある一個の港に過ぎぬが、其外なるものは眞の大海で、其れを取り巻いて居る土地は非常に大きな土地である。然るに此アトランチス島には驚くべき大帝國があつて、全島は勿論、其他大陸の一部を支配し、ヘーラクレス海峡以内は、リビヤを征伐し、エジプトにまで至り、又歐羅巴を征伐してツルレーニヤまでも其勢力を及ぼして居た。

**水神ポセイドーンの領地**——元來此アトランチスの島は、始め神が其支配すべき世界上の領土を分配する時に、水神ポセイドーンが得た所である。ポセイドーンは自分の領分として此島を得て、人間の女子に由つて數多の子を生み、其等を此島の一部に住まはせた。其地は海に面し全島の中央に一つの原があつて。此原の近くに又中央に一つの山があつて、此山に此國に始めから住んで居た土地生れの人間があつて、其名をエウエノールと謂ひ、レウキッペと謂ふ妻があり、其間にクレイトーと云ふ唯一人の娘があつた。

**宮城**——此少女が年ごろになつて兩親は死んだが、ポセイドーンは此娘に戀着して夫婦の交りを爲し、土地を裂いて環のやうにして、女の住む山を圍み、之れに廻らすに交はるゝに大小の

海と陸とを以てし、——陸は二圍し、海は三圍しにした。ポセイドーンは神のことだから、何でも出来る。いろ／＼の裝飾を此島に施し、又温泉や冷泉を土地から噴き出させ、種々の食物は土地から出来るやうにして、最も愉快の所とした。

**海神五對の子**——ポセイドーンとクレイトーとの間に五對の子が出来た。其長子を宗領として彼れには最も良い土地を與へ、其他の子等の上に立つ王と爲し、他の子等は諸王として多くの人民や廣大な土地の支配を與へた。

第一の子をアトラスと名付け、其島をアトラスの島と云ひ、其海をアトランチスの洋と名付けた其雙生の弟の名をエウメロス又たガディオロスと名付け、其國の名となつた。

第二對の雙生は、兄をアムフェレースと云ひ弟をエウアイモーンと云ひ、

第三對の兄はムネセウスと、云ひ弟をアウトクトーンと云ひ、

第四對の兄をエラシッポスと云ひ、弟をメーストールと云ひ、

第五對の兄はアザイスと云ひ、弟をディアプレベースと云うた、

凡て彼等と其子孫とは數世此大洋の中の島々の住人たり、又た支配者であつて、其勢力範圍は

廣大なものであつた。

其富有——此の通りで、アトラスは名譽ある數多の一族を有し、王國を保ち、數代之を長子より長子に傳へた。其富は實に非常なもので、世界上の諸王侯の未だ嘗て有したことなく、又此後とても有すべしと思はれず、凡て求むるものは、何物でも、或は都會にも地方にも供給されぬことは無かつた。其れは此帝國が強大であつたから、いろ／＼の物は他國から之を得、又た日常の必要品は自分の島の中に出來たからである。そして如何なる固形體でも流動物でも此島から出ぬものはなく、オリカルコン（黄銅）の如き貴重な金屬も澤山此島から出た。材木も多く、家畜も野獸も多く、其等の食物も豊かである、象は此島に甚だ多く産し、湖水に棲むもの、沼に棲むもの、山に棲むもの、野に棲むもの、香氣ある樹木、或は根のもの、葉のもの、或は花或は果物豆類、穀類、油脂類等、實物、貯藏物、慰樂の食物何一つとして無いものなく、其等凡てを此島は無限の多量に産し、其人民は此天恵に浴して、神社、宮殿、港灣、船渠などを心よく建築した。

土木工事——彼等人民は始めに王宮をポセイドーンや、祖先等の住うて居た場所に建て、歴代其裝飾を繼續し、列王皆其力を極めて前王に超え、遂には其建築は驚くばかりの宏壯美觀を呈するやうになつた。又た海の方から始めて運河を作り、前に謂うた水の帯を港として、最も大きな船舶を出入せしめるやうにした。其王宮を圍つて居る水の帯には所々橋を渡して、陸の帯に聯絡せしめた。

凡て水の岸は石の壁で作り、其石は白いもの、黒いもの、赤いものもある。前に云うた三廻りの水と陸との帯、其の帯の岸の壁は、最も外のもの眞鍮、其次の中のもの錫、最も中央の城砦はオリカルコン（黄銅）を以て蔽うてあつて、其赤い美しい光は見事なものである。

此城砦の中の王宮の中央にはポセイドーンと妻クレイトーとに奉獻した神聖の宮があつて人を近づけず、黄金の圍垣が廻らしてある。是は右云うた十王子の生れた所で、人民は毎年十地方から其季節の果物を奉納して來て、十王子を祭るのである。

ポセイドーンの神殿——此にポセイドーンの神殿があつて、神殿の外側は銀で蔽ひ、高い塔は黄金で蔽うてある。屋根は象牙で作り、金、銀、オリカルコンを鑲め、壁も、柱も、床も皆オリカルコンで包み、神殿には黄金製のポセイドーンの神像がある。其像はポセイドーン自身は車の上に立ち、羽根ある六つの馬を馭し、其周圍には一百の海の女神ネレイスが海豚に乗つたも

のがある。

此神殿には又、私人が獻納した澤山の神像があり、神殿の外部には十王子や、其王妃の子達の黄金製の像があり其他諸國の王や、私人が獻納したものがある。此に又祭の机があつて、其大いさと巧妙なことは、莊嚴なことに匹敵して居る。

其他の設備——其他に又た噴水があつて冷泉や温泉が湧き出で、人にも家畜にも入浴せしめることが出来る。又た其等の水はポセイドーンの森に導かれる。此森の樹木は丈高く葉は美しく、驚くばかりである。又た是より外の環を成して居る陸の帯には花園あり、運動場あり、競馬場あり衛戍所もあり、船渠もある。そして其二廻りの最も外の水の帯の港には諸方から來る船は無數で喧噪雑沓の聲、晝夜鳴りも止まぬ有様である。

都市村落——其第三の水の帯の外に都市村落があつて、河あり、湖水あり、牧場あり、諸方に縦横に運河を掘り、運輸にも灌溉にも何一つ不便のないやうになつて居る。

制度——海陸の軍備も十分に整へられて居る。此國の親戚國十王の國は、決して互に侵すことなく、アトラスの正統を宗主と戴き、此王統を守護し、攻守同盟を結び、正義と敬神とを以

て憲法の基礎と爲し、每五年目と六年目とに十王はアトラスの王宮に集會して、種々の事を評議し、又た神を祭り、敬神と忠君と、正義とを誓ふことに定めてある。

有徳偉大の國家——彼等は此通り、數世其善良な制度と性質とを保ち、人生種々の機會や相互の交際には、温和に加ふるに智慧を以てし、徳義以外のものを輕蔑し、金錢の如きは度外視し寧ろ一種の重荷に過ぎずと爲し、決して奢侈に流れることなく、富も彼等の節度を奪ふことが出来ず、種々の利益は却つて徳義と友情とから來るものであることを知つて居た。其れ故に彼等の國々は有徳で、而も強大であつた。

横暴墮落——然るに國民にも諸王にも、何時とは無しに、人間分子が過度に入り込んで、神聖な分子を稀薄ならしめ、人々往々不法な舉動を演ずるやうになり、一步々墮落の路に進むやうになり、貪婪不正となり、暴横を以て光榮と思ふやうになり、ヘーラクレスの柱の海峡から内はリビヤ、エジプト、ツルレーニヤの土地を征伏し、尙ほ其大勢力を集中して一撃以て天照アテナ大女神の建國した希臘のアテナイを征伏しようとした。

全敗——アテナイは小國である。他の諸國はアトランテス帝國に屈伏したが、獨りアテナ

イのみは屈伏せない。勢孤立たらざるを得なかつた。けれども其巍然たる愛國の大精神は、アトランチス帝國の大軍を物ともせず、能く至極の大難に堪へて、襲ひ來つた寇を撃破り、又た併せて他の諸國を救うたのである。此まで書いて現在の世界を見ると、丁度此アトランチス帝國のやうに正義を尊重した時代が有つたが、又た墮落して暴横になつた國が太平洋の彼方にある。又た日本は天照アテナ女神の建國し玉うた國で、これ亦希臘の趣がある。プラトーンの「アトランチス物語」は或は我々の國家とアトランチスの末路に似た國とに關した、何かの豫言では無からうかとも思はれる。

然るに此戦争の後、激烈な地震と洪水とが有つて、一日一夜の中に希臘の勇壯なる人間は盡く地中に埋まり、アトランチスの島も亦海の底に陥没した。其れ故に其部分の海は、途に泥の淺瀬があつて渡ることが出来ぬやうになつたとのことである。(拙譯プラトーン全集第四卷(舊版第二卷)クリチアス篇、一名アトランチス篇)

アトランチス島何處——西洋の學者は頭腦が悪いのか、又は研究材料が無い爲めか、古代の事に關して甚しく誤謬と無學とがある。かのトマス・モーアの「ユートピア國」(實はウト・オ

ピヤと發音する)の如きは「無何有國」又は「空想」の代名詞として扱つて來て居るが、實は明瞭に日本の昔の津輕の善知鳥國である。又たアトランチス島も殆んど其れと同様のプラトーン的空想國として扱はれて居る。實にケンカラヌ事である。

大西洋に非ず——けれどもアトランチス島國は何處であるか、アトランチックの太平洋と云はゞ大西洋の事であり、アフリカ西北部にアトラス山脈などの山もあり、又たヘーラクレスの柱の海峡と云はゞジブラルタルであると言ひ來つて居る所から、此アトランチスの島は大西洋に在つたものとは從來の學者等が見當を付けたものだが、此島の記事や、海神ポセイドーンの十人の子等の名稱などを研究して見ても、此アトランチス島は如何にしても大西洋方面でなく、又たアフリカ方面でも無いやうに思はれる。

今若し假にジブラルタルの海峡を、ヘーラクレスの柱の海峡として、此島の記事を読むとしても此海峡の西口に、其様な大きな島が在つたが、後に陥没して、泥海となり、船で渡ることが出来ぬといふやうな形跡は少しもなく、地文學上からも何等證明を與へぬであらう。其れのみならず、其方面に何等その様な歴史も傳説も徴すべきものは聊かだに無い。殊に大西洋は甚だ深

く、西班牙、阿弗利加の沿岸でも皆一千尺あり、其れから少し離れたら皆一萬尺以上の深さがある。かの馬尾藻海には馬尾藻が多いから、或は陸地の陥没かと思ふ者があるかも知れぬが、大西洋の此部分は海の中の最も深い所で二萬尺以上の深さがあり、到底大西洋に大きな島が陥没したなどとは、地文學上、又た測量の實際から言へぬのである。

**太平洋馬來方面**——從來西洋の學者がジブラルタル海峡をヘーラクレスの柱と思ふたが抑もの誤り。前にも言うた如く希臘神話は主として東洋神話であり、ヘーラクレスの神話地が馬來半島に在り、マレイの（語源 Mala は棒、柱を意味するから馬來半島はヘーラクレスの柱で、其端のシンガポール海峡が、此に「所謂ヘーラクレスの柱」に當つて居る。此海峡から外即ち東は大洋洲なるもので、海神ポセイドーンは海の神、大洋の神として、此大洋洲の神と見るが當然と思はれる。

**アトランチス島はスマトラ島なり**——阿弗利加や、大西洋には明瞭にアトラス、又はアトランチスの名はあるが、其れは此神話の記事に合はぬ。太平洋上には明かな此名稱は遺つて居らぬが、對譯した名は今も尙ほある。アトラス、又たアトランチスの希臘語は羅典語のスマトラ

と同意義であつて、歐羅巴、阿弗利加方面には希臘語で傳はり、東洋には羅典語で傳はるの相違があるばかりである（A. klas = Sumatra）。かのアトラスとは「終末」「積集」を意味し、スマトラも亦同じ意味である。「終末」を日本語「オヘ」(Oe)と謂ひ、十二支の亥（猪〇〇）の語に當り、スマトラを獅子國（猪）又執獅子國と謂ふのである。今語源論をせないでも、カリドーンの猪狩のアタランタも、アトランチスと同じ名で、彼女は獅子（猪）に化したとあるは、アトランチスは獅子國を意味することを證明して居る。「大唐西域記」に所謂執獅子國の本原地は錫蘭島で、其移民國たる第二執獅子國はスマトラの事であつて、スマトラは獅子國たることを證明して居る。そしてアトランチスとスマトラと、獅子國とは對譯になつて居る。さらばプラトーンのアトランチス物語は西洋方面では讀めぬが其地理を東洋方面に持つて來ると讀めるのである。——是れはポセイドーンの子の名アトラスの地理研究である。

**娑竭羅龍王の地は瓜哇のジャガタラ**——東洋の神話及び傳説に娑竭羅龍王なるものがある。彼は偉大なる國を有し、海神である。海神は素より希臘神話のポセイドーンに當つて居る。又其強大な國家があるなどは、プラトーンのアトランチスの記事と一致して居る。



瓜哇の今のバタギヤは昔のジャカツラ (Jacatra) の舊跡に建てた都だが、其ジャカツラは日本人の所謂「じやがたら」で、娑竭羅龍王の名を負うて居るに考へると、海神ポセイドーンは此地を宮居としたと考へて當然と思はれる。又地理に關する現代的記事に據つても、此バタギヤの大きい港であり、大きい都であるなども、プラトーンの所謂ポセイドーンの宮城であつた面影があるやうに見える。プラトーンは大地震の爲めに此島は海の中に陥没して、其後は泥海となつたと言うて居るが瓜哇は火山國であり、度々地震があつたことは勿論で、特に一千六百九十九年にも大地震があつて、此都は殆んど泥になり、其れから大不健康地になつた。此様なことをプラトーンは「此島が陥没して泥海になつた」と傳へたものでは無からうか。若し其うでないとしても、瓜哇附近の海は淺うて、マルコ・ポーロ紀行には「海は甚だ淺く四尋程しかない」と云うてあるのも参考になる。

海神の宮城と「菅原」の梅、松、櫻と、春藤玄蕃——此に聊か比較研究の材料がある。或は想像が過ぎるかも知れぬが、一種の或者があると信ずる。私は嘗て「菅原傳授手習鑑」(現日本に於けるものではない)の劇を見た時、菅秀才の首實檢者春藤玄蕃の着て居る大紋の紋所を見ると、



ポセイドーンの宮城圖  
(春藤玄蕃の大紋)

圖に示すやうなもので、海神ポセイドーンの宮城は、中島を中央にして陸の環は二廻し、海の環は三廻しあり、其れに橋が架けてあるとの記事は、全く此紋所の圖(龍が玉を握る形か)と同じとの感じが起らざるを得ぬ又其れに就ては理由がある。

元來今のバタギヤは昔から名稱でも都市でも建築でも幾變遷、幾改築を経たもので、始めはスング・カラッパと言ひジャカツラと言ひチリランと言ひ、今はバタギヤと言うて居る。そして是等の名が皆「菅原傳授」の劇に人名として現はれて來るのである。

菅原戯に梅王、松王、櫻丸の三人兄弟がある。菅秀才の首實檢の時に春藤玄蕃と松王丸とが來る。是等の人名が盡くバタギヤの舊名別名であるのは語源學の發見し得る所で、従つて春藤玄蕃の紋所が、プラトーンの所謂海神ポセイドーンの宮城の圖を表はしたものが證明される。

梅——海神ポセイドーンとは「見る」と「及び「目」を意味し、目の希臘語源を Ομνηα と謂

ひ、之れが又「海」「馬」「梅」となるので、海の神の名は即ち梅で、此に菅原三人兄弟の中の一  
人梅丸の名が在る。

松——バタギヤは前に *Tjilivong* と言うたが、チリランとは英語其他の *Till, Tulle, Tilien,*  
*Tilon* (チローン) と同じ語源で、「……まで」「待つ」を意味し、待つは「松つ」と同じ語であつ  
て、此に松丸の名が在る。

櫻——此チリオンの市の趾に *Jakatra* の市が建てられた。ジャカツラは娑竭羅龍王の名で、  
語源は羅甸系の *Sacirra* で、別語 *Sakra* に對譯せられ、何れも物の頂上、冠榮、櫻を  
意味し、此に櫻丸の名が在る。

春藤玄蕃——バタギヤの舊名を又 *Sunda, Kakalappa* と言うたが、之れが菅秀才の首實檢の  
檢視の役人春藤玄蕃の名である。*Sunda* とは英語の *Sound* 獨逸語及び其他の *Sund* で、*Sund*  
が *Shundou* と發音され又 *Sund* の發音で地名となつたに過ぎぬ。そして此語は健全、堅實等を  
意味する。又玄蕃とは希臘語 *Gen-pha* (*Geno-phano*) で、檢番を意味し、カラッパ *Kalappa*  
(*Kalaopia*) の別譯である。其れ故に春藤玄蕃は檢視役として來て居る。そして我等が此バタギ

ヤが海神ポセイドーンの宮城であり、春藤の紋所が、ポセイドーンの宮城の地圖を表はして居る  
と言ふに就ての理由は此に明瞭に確定するのである。

バタギヤ(「連れ」)——現在のバタギヤは娑竭羅龍宮の改築されたもの、又た其現名である。バ  
タギヤと云ふ地名は、獨逸にも、和蘭陀にも、亞米利加にもあつて、獨逸のヴバリヤの今のパッ  
ソの市は *Batava Castra* と謂ひ、且つ現代名バタギヤは和蘭陀人等が近世名付けたものでな  
く、太古から有つた名であることが日本の材料で知ることが出来る。何故ならば *Catavia* なる語  
は希臘羅典語の「伴に行く」、連れ情を意味し菅公の歌に「梅は飛び、櫻はかるゝ世の中に、何と  
て松のつれなかるらん」の「其「つれ」なる語は、即ちバタギヤの別譯に當るからである。此通に  
海神ポセイドーンは娑竭羅龍王に當り、娑竭羅はジャガタラで今のバタギヤである、海神の宮城  
の地理的記事は春藤玄蕃の紋所の繪と同じく檢視役の春藤玄蕃は、*Sunda*・*Kalappa* 即ちバタギヤ  
の舊名となり、梅の名はポセイドーンの別譯に當り、松、櫻はチリランとサカツラの名となり、  
「つれ無かるらん」のつれの語はバタギヤに別譯されて居ることを知り、此研究の結果を得しめ  
たのは菅原劇の春藤玄蕃の大紋の紋所が手引きを爲たのであつて、我等は日本の舊劇が此紋所な

どを明確に後世に傳へ、學界の問題であつたプラトーンの「アトランチス島物語」に明確の解決を與へしめたことを感謝する。

**海神十王子の土地**——ポセイドーンは五對の雙兒に、自分の勢力範圍の土地を分け與へた、之れは瓜哇、スマトラから北西の方馬來一帶、恒河口の地に及ぶものである。其第一對の兄アトラスにはアトラス島又たアトランチス島を與へた。之れは瓜哇スマトラであることは前に言うた。其弟はエウメロスと謂ひ、ガディオスの地を與へた。エウメロスは Eu-melos で、下半語 Melos は Melos 即ち馬來（馬齡、長き壽）であり、其ガディオスの土地とは前にヤソンの章に謂うたシムブレー・ガデス即ち今のシンガポールの事である。

第二對の兄アムフェレース (Ampheres / Amphi-ryesth 船守と譯す) とは馬來半島の根の現名 Amherst は其れ。其弟ヨワイモーン (齡健在) は其サルギン (健在) 河一帶の地である。

第三對の兄ムネセウスは下緬甸のミンプ (Mina / Mu、胸、宗) の山地、弟アウトクトーン (新地) は其海岸地方昔のアルダントである。

第四對の兄エラジッポス (竹、管) はアラカン山地方、弟のメレストールは其海岸地方キッタゴ

ン一帶の地である。

第五對のアザイス (Az-as 強風、息、風本) は恒河の西の支流バギラチ川口のカニンング港地方弟チアプレベース (判明、首長) は其北方クリシナガル (判明) 地方である。

以上の説明に據つてアトランチス島は瓜哇、スマトラであり、ポセイドーンの宮城は瓜哇のバタヤであり、又其十王子の土地は馬來半島一帶から、北は恒河の下流地一帶までに及んで居ることが知れ、プラトーンの「アトランチス島」は、決して大西洋方面でない。

**西極のアトラス國と東極のアトラス島**——然し西極阿弗利加にアトラス山脈の名があり、大西洋たるアトランチスの海の名が當然存在すべき理由を我輩は否む者では無い。何故ならばアトラスとは終極を意味する語で、前に希臘神話にクロノス時代の勢力は中國たる西部亞細亞から、次第に西の方に向うて進み、アトラスが極西の地に移されたことを言うて置いたが、即ち西極のアトラス又はアトランチスの名のある所以である。けれども神代に革命があつて、クロノスの神代は轉覆せられてゼウスの神代となり、其れから以後は、其勢力は中國たる西部亞細亞から漸次に東に向ひ、極東スマトラが「終極」地の名即ちアトラス又はアトランチスの名を得

るやうになつた。是れはプラトーンが「政治家」篇十五節クロノス時代からゼウス時代になつて「世界が反対方向に逆轉した」と言うて居る中に暗示があるやうである。

其れ故にクロノスの神代のアトランチス國は西に向つて、其終極は阿弗利加極西及び大西洋のアトランチス洋の名に存し、ゼウスの神代では東に向つて、其の終極たるアトランチス島はスマトラ、瓜哇となることになつて、西極と東極と、二つのアトランチスの國が出来たので、プラトーンの「アトランチス」は、ゼウス神代のアトランチスで、スマトラ、瓜哇が其れである。西洋の古代學者は一向に是等の事も、語源學も地理學も觸れて居なかつたから、何等の結果も得ず、可哀そうに、アトランチス島は無何有の國であるなどと思ふやうになつたのである——是れは今日限り訂正すべきことを、東洋人たる我々から世界の學界に向つて唱道して置く。

### 希臘羅馬神話附餘終

大正十五年十一月十日印刷  
大正十五年十一月十五日發行

(希臘羅馬神話奥附)

◆定價金四圓七十錢◆

著者 木村 鷹 太郎

發行者 東京市麴町區飯田町四丁目二十番地  
海 老 原 丑 之 助

印刷所 東京市下谷區池ノ端七軒町卅七番地  
教 文 社 印 刷 所

印刷者 東京市下谷區池ノ端七軒町卅七番地  
横 山 喜 助



## 發行所

東京市麴町區飯田町四丁目二十番地

## 教 文 社

電話四谷四二一一番  
振替東京三三七二四番

木村鷹太郎氏重要著譯書目

- ◇ プラトーン全集(全十一冊、價四十五圓) 富山房發行
- ◇ バイロンー評傳及び詩集(價四圓八十錢) 教文社發行
- ◇ 希臘羅馬神話(價四圓七十錢) 教文社發行
- ◇ アリストテレス政治哲學(興亡史論叢書中) 其刊行會發行
- ◇ アベスタ教經典(二冊、世界聖典集中) 其刊行會發行
- ◇ 耶蘇教の日本の研究(震災燒失品切れ)
- ◇ 東洋倫理學史(同)

- ◇ 東洋西洋倫理學史(同)
- ◇ 日本太古史(上下二冊)(同)
- ◇ 在五中將業平秘史(同)
- ◇ 日本建國史(同)
- ◇ 萬國史(同)
- ◇ 東西古今娘子軍(同)
- ◇ (哲學と人生)(同)
- ◇ 一天四海五大洲の大日蓮傳(著述中)
- ◇ 星座と其神話(震災燒失、目下訂正増補中)

511  
31

終